續[illegible]庵集五篇　全

和書門 一八二二七類 二一八號 七函 六架 冊

内閣文庫 和書類 一八二二七號 二〇一函 一七架 六冊

新

内閣文庫
番號 和 18227
冊數 6（6）
函號 201 524

糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり
綴じ部（喉部分）の文字など開きが不鮮明な箇所あり

国立公文書館
National Archives of Japan

續草菴集玉箒巻一

本居宣長解
稲懸棟隆
須賀直見　校

春夏部

海邊早春

難波がた霞も波もへだてなくに猶春さえて浦かぜぞふく

諺解云。錦霞ゆゑうら風吹く。霞も立かねて猶さむし。波も冬時分につゞくハなど哉。春風ながらゆるくもなく立し。猶ハまださむし。春さきまださえて風吹し

○今按。諺解に波も冬時分につゞくハといへど。春風ならてといへるハ風情お遠せり。むずかし。此歌ハ浦風のさえわたる。まだ春めかぬよしを詠るなれバ。春風ならにゆるく猶く波の立とよむべ

きにかゝれバ。波のしきなくなるハ。沙のうへをうちよするなるし。猶く
にほひとかゝる詞のつゞきを以て知べし。隆兼が首に谷川のうち
出し波ハ春しらせて又さえかへる山おろしにほひこぼるゝと同じ
きなるし。難波の海に沙をよむる例多し。此条にもかゝり。

基俊評　まて之首すよく侍しに梅

雪ふるうちに咲るをいへるより春ハしらざるさまなげし梅乃盛なるを
讀解云。梅花ハ春に成て咲物なり。さて深きにも盛にある物
なるに冬ふる雪乃内に咲物とせバ。春ハ早くより盛になりてく。
咲物とはいふなるなきをさまなげし梅の盛といへり。此しかバえ
咲く物とハいふべくもなく。むしろ盛なりといふへし。
雑注云。冬ふるゆえハ。こゝ本ふる花ハ春来て咲ぬるに經へて咲ぬ
ま冬。梅ハ春乃雪ふる内より咲物つれバ。春ハしらず一向に梅の花

のみ盛ぞといへり。しかどといふ詞にハ。のこといふにてなどこそあら
ぬなし。讀解に。梅花ハ春まで盛なく咲物くといひ。又冬ふる内より咲
物なれバといへり。されバ冬の雪ふる内より咲をゑしるをもて。
春ハしらず梅の盛ぞとハよむべけれバ。春ハしらずさまなげしといへるも。
春ハ一向にしらず梅のひのまゝ盛ぞといふ義也。春の雪ふる内より
咲るゝ梅を讀り。冬より咲といふ義也。冬にはより咲なき侍りから
冬の雪ふる内より咲るる梅なれバ早梅の事になるべし。しかしく隠れり
○今按。讀解にまさるべし。但し梅花ハ春に成てこそ盛に
なる物なるにといへるとハ。前田の事をもてゆくまぎらし。雑注。
春ハしらず梅のひのまゝ盛ぞといふことをいへるハ大きに誤也。此しくも
まなしバ。二の句をや咲物くと讀べし。咲物なるよしといへるよりふ
詞にかゝれるず。又さなげしふるをにもあるがてり。さなげしハ。誇しれ

皆ながらといふべし。此歌の梅が枝はさながら袖にうつりて傳ふ
なにてもしかるべし。又しめじといふ詞にはのこといふてふときこえて
見ることゝいへる。先は淺解に。むかへに鶯ぞうりといふ心といへるに
くよくるゝ雛伝ハ梅のことゝ見ゆれど。さにはいはれず。鶯の
ことゝいふ心。又冬の雪が内より咲初ることを春つげて梅のさかり
ぞとはよむべくとれといへるもいはれぬ難也。先春は。まづ春はまださ
ながら鶯といへるは春がたちたれより一日ものこさで皆ながら鶯の
ことゝいふことなきば。冬の内より咲初しけるをめしをも
ふにぬく咲初るなしば。春の始より鶯合てハ行るまじきゆ。彼ゆゑを
冬より咲初るハ早梅也といへるもうちきたるよし。さもしにいはゞ。雪
をうちまかせてハ冬の物なれバ。たゞ雪の内にと有を。春の雪と
せんもいかゞと難也べし。されど春の哥なれバ。たゞ雪とハいはれず。

春の雪と自(ミツカラ)も見ゆるにいはれや。然らば梅も冬の内より咲て
ありた。春に初くよめる哥なれバ。此つ子の梅也。春の哥に早梅
ハよむ初におしれ。右のごとくなれバ淺解を難じたるおぼしき
皆いかしれく然べし。されば事の理をもてつぶさに難ずるにハ
右のかくなれた。斯し所てハいはんやるしきにるて。却て作者
の心におしるべし。雪の内に咲初るとハたゞ冬の頃より春の始へ
かけて。冬中しかるべし。春の雪ぞ冬の雪ぞといふそりんも。
実ハあらざまさんなるまじ。

霞白氣より影を隠して帰るなりし雁に帰雁

立帰る雲の帰雁をよそへてや花なき里に春(ハイ)をまつらん

淺解云。本哥ハ春霞立を見すてゝ行雁ハ花なき里に住
やならへる　古今　いせ　雁ハ花なき里に住ならひたれば。花なくても春なれば

ならバ。庵の主にて春を知てゆるし。さて又その花なき里に住
なる人ハ。何にて春を知べきやうのなきまゝ。庵の内るを
読給ふて。さてハ春しとあるにて。いかんとし庵が内ゆるを来
ぬとみえしぢや花なき里乃春ハあらん おぼえ侍る也 後の為也
○今按。諸解まて又といふより下の注を見べし。庵の主にて
春を知てゆるしといふことハむづかしき事也。本意をあらしく
分けしたる注也。本意ハしらんバ。春庵の主にて花も咲ぬべき気色なるにそれ
ぞきみ見捨て庵の内るハ。花のなき里に住なるひとく。花のおもしろ
きを見捨ぬおやとよめるし。花なき里に住なるてなれに。庵に
て春を知るといふことにハいらじ。

元亨二年二條大納言家一日千首に花

いひける時山路をわけて庵まし咲るらし花のさかりに

諸解云。此句ハ元来谷にハ春もよそなれバ咲てちるも知る物
思ひもなし（ちる歟 除書）何だ心をとめり。花の盛りの時ハ散る花をも咲
くもちる物なれバいづくの山てむかしの所をたづねてハ見せず
詠りれバ。一方を見るが。又寄り一方の山のむかし詠べきかバいか
くもおしなべ一度に見るやうにいひたる深しきとし。又眼
前にあるむを詠るにあらじ。花に対してよるにいかなるんか。
惣じてむかハ咲る絶なく散る物なれバいつり。
○今按。世間の花盛の比。宮に居りて思ひやり。いづくの花を
も詠まほしがり詠くえんと思へれ。花ハ咲てちり散る物なれど。
まやうにても庵の内にハ日数をへて。それを見る内にう
しこの花ハまやちるべけれバ。それもまどくハ見つらしけれどう
んにそれハ。まづいづかたの山路をかわけて見んと思ひ

見ゆる故也。詠解のごとくいづくもおしなべ一夜よ見る中に行る
まがし花といふべきを見ては詞たらぬゆゑなし。文花に対して見るにも
いつるも。上の句にてむけし花のさかりなとは世界の花の盛の時をいへし
源子花入家大地去家居おりして。おもわれし時西後花
山のうちに夜ぐるる時の名は見ゆるや面影にいひたちかに言葉
詠解云。夜の中はうすくらくて花の色の見えざりしが。今やうやく見
ゆるは。夜のあけて明らかに成て。霧も次第に晴行なるべしとなり。
○今按。うすくらくてといふは。今眼前にみゆる景をいふ事に行しが。さて
ての山の花は常の花をいふ也。而我はいつにては山のもの花の名は霞
へだてて見えしぬに。今よく見ゆるは夜後のさしあらんとよめるなり。
さてこそいふは夜のふるまへにはなく霞の夜の後は霞のたちて地たなる
故に。山の花のさかりにみゆるなり。然れば花の色のよく見ゆるが夜のあけて

見なりんといふべし。述べて。なかりきとは。何事にもすぎ行き給ふ時
後までかはれるをいふべし。さて夜のながりなれば。花も見えしぬ理なる
べきを。却てよく見ゆるとよみなせるがめづらしき趣なるべし。など
見ゆる一本にちりきましと何るは。まさし。然はよしもんはぬなるなさり
きく人の夜のながりに花の見ゆる理は有べからねど。思ひて。直ちし抱
しまじくなれ晴る方をしらせきて。いはれど。一首の言かけるべし。
その時は。春夜は。ふる先見えしかど。まだ霞の深くへだてしとの見え
しくなに今やうやく花の色の見ゆるは。明しより霞にはかはれ夜あり
しが。今晴るにあはれるなりんといへるなり。詠解述べて趣たまをとり
だ。おそれは魂なし。夜のさてながりになるといはずしたるべくも為し。
物の移りをながりといふは中古より行はれど。事によるなり。さてそ
まかりゆきては俗言になるなり。又夜の中は花の色の見えしがたく云へ

ふりくるがごとし。ちりまがへば。しかもちらふ雪とこそよむべきに。
夜とよめる迂遠にて何の詮なし。
聖護院宮本懐紙にしるされたりし時二条氏アヘるとも。
なにしおふ来て京よりも待しに西坂本
雪となる花かと見えて春雨ふりかゝれば花さへ山かぜぞ吹く
諺解云。雪のふるおりには。くもり雨のふりて雪消わたりて抽きあれば。今春雨のちりくる時。風の吹て花のちるは。雨後に雪の外なりと見ゆるなり。
雑註云。此歌の意は。春雨のふる程はくもりてものもみえざりしが。花のちりくるにさそはれて雨の雪となるやうにみえて。あしくは花に春風の吹ぞと誤り。花を枝よりつたふる雪にみえてさむらん。花と雪とは。春雨とよみたる故にいへり。諺解のごとく

花のちるとはいへど春花の題にかなへり。
○今按。雪にと行る本を見べし。とは見えし。まで諺解大意をゑかたるゆへかるいはあらず見るべし。まづ雪のふるおりには。くもりぬれば雨のふりてといへる事一偏なり。必ず春しりたきは木の間にふかくれど。此ハ冬の詞也。然ば雨なり。それよりやがて雪になるすがたある故なれば。今春雨時にありてちる時。花のちるをしきは。かの雨が雪になる兒の如くに見ゆるなりと注すべし。雨後に雪の如くみゆるといへる心風情をさしるがへり。雨後には行はれず。また雑注も一首の意は同じことなれども。花を枝につたはる雪にみえてするといへるは見えず。それもあらば。山風ぞ吹といふ詞要用の詞也。雪になる兒とは。今ふる雨につきていふ詞也。枝につたはるをさはいふべからず。是ハ春雨の花のにちるを見つるからそれをさそふ雨にちらしていふことよりなる説也。

されバ花の題にハよく〳〵何にても旅ども。或ハきハめて落花の心なる也。此下
花留客浦花などいふ題にも落花をよめり。雑体にも然るを
もちバ何とか注せるべきなど。集外内の例をもよく考へ出して。さうざ
つぶさにおぼめくるハいふにぞや。さて一首の心。今一ツの見様あり。まづ上
二句ハいたづらに春雨のたえまなきうちのさまなり。花くもりて山も見えず。春
雨のふるに。山の花の雨そゝぎまじつて落るさまし記ハ雨のうれぐ雲
にかくれゆく花の中に見えしかるに。その春雨然るをおふに春さがし
てうち山も何かりまつ。花の梢に風の吹くちるを見てまてハ
雲のやうに見えしハ此花のちるなりけり。始てさとりたるさまなり。
花に山風ぞふくと留りする花の名をみるべし。又ちるとバ花り
といふ俗勢をよそと味ふべし。

花留客

我のみや家路わすれん落花ハ人も忘るゝ春の本乃本
諸解云。本歌 此里に旅寝しぬべし桜花ちりのまがひに家路わす
れて 古今 花ハおのれが本本にも人をとめんが為にさそ
よ然へちりぬるに。今ハ家にぞかへりて花に人をとめんとて。家路に迷
ふるさとをわすれて本来をさとれど詠める也。忘まんハうらぶ
れてかへりなん。忘れていかんと治定していふてふなる也
○今按。諸解 花ハおのれが本本にも人をとめむ。よそへちりゆく
といへるハおかしけれど。花ハ本〳〵にちりとまるなといふ心に
ぞ。梢にとまりてしぐれて落るなり。ちる花ハといふも本をへだて
本の字と心へハりきてみるべからず。花ハ人もとめぬ本然。その本
に家ぞかやといふなり。正集春部に古ハおなじ家路をぞくり古い
の家路忘れての花の面影と同じなり。考へ合すべし。古へて或を

ゑらるハゑやう時節太切也。又ちるまんハうるがふ心にあらんば。治定しるゝ
ゑてふはこといへる語也。ありしまんなれバ上のやめしばぞとかるべ
し。やといひくんとちゝて治定ちるす例なし。譯をみなる
俗語にまゝよふるすなられ。歌時ハ花も法度に心をそらさぬて。
ちるびにゆくハさぞさこと有べかりき。花ハおのが梢なるさへ心もとめ
ざ芸おもりすみをしらば。旅のとこ花に心をそらめて。旅路なるわ
ちまこつ。亦時本にも日数をおくるべきるすゝるぞと。旅なぐら行方
の花に執着せるるをりどきる歌也。難句旅のとやハのことし。

羽軍家にて浦花

風ふきバちるをうしとて海ちかき里にすむ春ハ花や見るらん

諺解云。春の比もいかしき海ちかき。さすが花のちるをバ惜む故に。
風を恨て花を見るらん也。恨むといふに浦見るをふくめて讀り。

海邊の家に恨とよむハこと無心あり。

○今按。本歌ちる意小町「ゆふ時もむ里のあるべにおくらなくに
うらみんとのみ人のいふらん」。行よの徑里にうつろひて倦るが類
ちとなきハ此歌を引べし。諺解のぬくな本歌なくて見ゆるにハ。
ただ海ちかくばかりいひてすまうかれり。徑里といへる強用になるべし。

花の盛に深山又葵花里に入せ損ひし時。吉花を

お坂の宮時ちるあり　いとゞ行まや人をうらむる心そしまぬせて

諺解云。ここあまやとハいとゞ行かりといふ義ありて。いまだ行まさと
下知するんとしあらば。若あまやなどの類にて。いづれも也と
いふなし。ここ歌にまハ小田時まもし　いとゞ行まや苗代の水を
えてしまうせて　新古今　勝命法師

○今按。いとゞ行まやハ。まままきていとゞあるなれんとおしそる

国立公文書館
National Archives of Japan

辞也。此あはれやあはれやの辞のうへハ。別にてにをはの考へに委し
くいへり。新勅撰ニ條太納言隆季卿坂の宴の宴書んあはれや
出る時清か影をぞぶらん。今ハ同じつきをあはれども。是ハんあ
はれしと影ふきし。混ずべからず

将軍家にて花下鐘

はつせ山さくらにかすむ夕ぐれのをのへよりおくれて鳴るかねの音かな

遠解云。初瀬山の鐘ハ。いつとも夜のあけまぬまぎれにあるを。桜の
花の白光見えて。尾上ハ早く夜のあけむれ。かねハおそく鳴るや
うに思ひけるを。おくれて鳴るといへり。云々

雑註云。夕時分。はつせ山の鐘ハつねに夜のあけぐれて鳴るなり。い
まだ夜ハあけ方桜ハ鐘ハあけざるが。桜乃花ざしをのへハあけゆく
て後に桜るて鐘のあらそふしより。遠解のごとくかねハ夜の

あけまぬきれにあるといへるハおくるゝといふ論なし。一首乃意
味を浅揣にあまり待るし。とかの外義のあるがひかるゝすてあるべし。
花の光見えて鳴まじき夜時鳴つるかねの夜に鳴るころあるある
鐘が。おくれよるゆゑに思ひけるし也。おくれて鳴るといふ詞つゞき
を見ふべし。常に鳴ぬうちにあるといふ意ハ行かれぬ。

○今按。遠解にあるがふべし。雑注も本ハさのとのやうなるまうし
もるしざるに。遠解をゆるしくみそてあひらくうちまをつよく破せ
んとせるかへり返りて己が注をも誤まり。いふにもあまりハまづ鐘ハ
夜のあけまぬきれに鳴ルといへるハ。おくれてといふ論なしといへるて
また鳴るらむが云し。遠解の意といへとも夜のあけまぬきれに鳴ルの
桜のあれども花の光早く見ゆる故に。鐘ハおくるゝとしてあるるや
うにといへる。義理明らかなり。然るを論なしといへるは何へ云しくい

ぶかしき難(ナン)じ。さてもあしまなきに鳴くと諸解にいへるを思よく
按あるさて。那須山の□ハつねに夜のあけて鳴なるし。いまだ
あけぬまにバ鶏ハなかざるにといへる也。又詩に。鶏ハ常に夜乃
あけて鳴なれバ。あけて後に鳴といふも同じ事なれバ。いかり
くても鶏ハおくれたし。あけれバ桜花の時にかぎりておかしくとよ
める歌ならバ。それにかなふやうに。よくよく工夫もあるべし。おのが
説の何の詮なし。一首の意味深揣にあるをバあけて。返てよ
く聞ゆる諸解をもあら難じたるハいかにぞや。手を拍(ウチ)て笑ひ
つべし。さて夜のあけむと鶏の鳴よりお後の備を。此方につきて
くはしく判ぜバ。常ハ夜のあけむと鶏の鳴と合く同時也。下句に
あかる鶏の声といへるを見るし。夜のあけむにつきて鶏もなるなれ
バ。鶏の鳴が即夜の明る也。然れバ諸解にあけぬさきに鳴といひ

へるもしるがへるに似たれども。一首の趣意に齟齬(サゴ)ハ妨(サマタゲ)なし。ただし
いへるがごとし。難は夜のあけて鳴といひ。明る時あるを
いへるに。あけむ時に鳴と明る時あるといふなれ。されバ
義理ハしるがハ孫ず。此のいひやうの掛きなにまぎらはしきし。あ
らてといひ。思へいまだよハあけざるに鶏ハなかざるといへれバ。
既にあけて後のうちと聞ゆるし。又明る時といへるも既にあ
けて後のうちと聞ゆ。実にまぎらはしき歌の論ならし。

清宗孝花石竜に宗居花

さびしさ堪なぐさむ宿の花盛　ひごろあせぬ人のうらみん

諸解云。宗居なけれども他のさくりにハおのづからさびしさもまだ
うしにやして久しく音信なき人さへもとひきてめづらしく思ふ
。さいよくさびしさをなぐさむし。毎日時あせぬ人のうらみに花をれ

とハいひがたし。此人も心に栄花をねがふ故に、頭に多き花をバさ
しおきて此山中へちるべくとりすゝめて有べしとこそいへ
なにて此ちる頃なにハよく世の中なるし。心をつくべし。
○今按。花のちるハ八日ごろ花もさかりでさびしかりし時にハあれど
つきもせざりし人の。今花ざかり也てさびしさをあぐさむ
此しもうひまよるかな(カナ)はじくハ常のさびしき時にハこゝろで
何とて今さびしくもなき時にハなぐさめんとよめるに此らん
ハ事を疑(ウタガ)ふ所以(ユヱ)を疑ふらん也。正集哥新野若菜の下に
くらしくいへり。讀解信之けり。彼注の意なれバ結句人もそひき
てとありてハうるはしからず。又初日此といへるより下ハいよくむづかしき哥なり。
かし哥の意なるバ大にいひよろし。さうへ上(カミ)にいへる意と別
別にありて一致(イツチ)せず。是ハ哥のらんの格を知らぬなるべし。

とりて。哥にもあはれをそへいひたり。諸(モロ)ていらんにかなへんと
しらる也し。或人曰(イハク)。花の時ハ人もうひ来て諸方にたること
とを悦ぶ。そ花の哥は本意とするべし。今の注のめでたしは花
を賞する情うすきよし。若それハ近き世の俗うるよし俗哥多
有けりとみすぐ料簡し。是すべて哥に何の哥ハ尋に有べき
なし。人にハ行るまじきなりし。己が心に格を定めて古哥を
も必それにかなへんとするハ私なるべし。作者の詠意ハまちがふあ
ぶなるて。まことにハ尋常の風情とかはるところもおほく有るめ
ぞかし。かざる哥の何つゞきても十ばの格のまゝにんれべし。
東山に住侍し比。むの盤に降る花大納言為おりて侍る
に。かへしていひやらざりし後。花の枝につけて流のゑ 教阿
けふ花の梢の梢嵐よりさそふに又もちハなん。 大納言 返し

かくてこそみるべかりけれ山ざくらちるまでみぬ宿は花のさかりは

標解云。蓮阿の留守ゆゑ。大納言家をまちもちえぬ所へおハしまして花をみたまひし。留守なるに何とやらん物のたらぬやうにおぼしめしし。されど主の留守なるにおハせし故に。蓮阿より花に心をとへるにおもひまいらせしが留守ならずしては。主ありても又留守の時節にこそ。かく詠ぜられし花に心をとへるとくりかへし見る事をえるべきと。心をおもひまはして賞翫して詠ぜられしとぞ。

○今按。標解に主ありても又留守の時節にありてといへるハよろしからず。ここハ俗言ニ。又もとめなんと詠るにさらにひろく花にむかへるをも見しりくてそこと八此方へ帰(オリ)来るはをいへるし。留守の時節にありてるるはことをうきてみるべかりけれ。一首の心ハ。又もいへとや繊(サ)にまだき主ありても又その外の留守にて詠うをかふるも

いろまじきをまたバ。主かへりにあはじとおもひまちうきぬ宿の花ハ。ちるづねおりてみんよりハゆかしくて。又もかく詠ぜられし。花を折て留守に来客をとへるこ此方へおとづれをみ給ふべきぞと詠る也。上二句に客を賞玩なんの深く。下の句に留守なりしを恨たるの心有り

蓮阿菴室にて冷泉宰相お家よりこれしに花友

尋見し友をバいさなふ山里も花ゆゑ人ぞしたしき那

標解云。山居ゆゑ尋給ふ友をさへいさなふ花なれども去年まできバおのづから人もおもひ来て。思ひのまゝあまされの人にあるまじ花あらばおもふゆゑ来ひかくもといふなきぬ也ま物ぞ凝滞せぬ心にて優寛なる所也。

○今按。標解花ゆゑと思ふ故来ひかくもいはまほしといへるハたゞしるかつり。又物に凝滞せぬ心などいへるハ家人の言にあ

らじ。歌ハすべて物に数帰し桃花あるかよりよく出る拙なり。
なべて近代の歌学者ハ。歌道乃本意をわすれまへだして。やゝも
すれバ儒釈禅録などの語をとり説（トキ）なすことを好み。歌人も
其道をはなれたるものゝ言つるハいかにぞや。此歌の心ハ。常の友をば
いとひはなれて山里にかくれすむ人にあらずハ。山住の本
意あるべきにもあらず。花なきにハえいとひも行へず。又しも常の人となな
きむつぶすよし。といんよろしきを言つる也。

入道二品親王家五十首歌に

つれなくて八十路の老をむかふるもことしばかりの春ぞと見め

今按。諸解に。今こそ年路花を見てかりとて何の益かあらんと
いふことゝし解（トケ）るハ。たがへること也。是ハ今より後。花を見るべき年
の数乃残りすくなきことを心にかけて言つる歌也。

見花

よなよな月こそ行かへ見る花も洞にすむ春ぞなき

諸解云。花こそハ春ごとかはらず咲きれ。よな〳〵月もかはらずすむ也。月
ハ世ひをそふる拙なれバ。さも有べし。花にハ拙思ひもこすからく
拙を。老の身として花を見るにさへも何となれバかなしき流
そしらずと侍るし。云々

○今按。諸解之説非也。歌の心ハ。春のあはれなれバ。よなよなの
月こそかはらずべくなすなれ。老人ハ洞がちくて。住すむまじき
花さへかはらて見ゆるよと讀る也。春秋のことなし

入道二品親王家五十首歌に

雲となり雪（きえイ）とつもりて咲ちる花もあるかなし山ざくら部

諸解云。雪にさくハ雲の中にも見て。又木陰にハ雪のおもくつ

ありて面白き事あれバ。吹風のうれへもあれど詠るなり。例令
こゝに花ちる峯の続きを後にや思ひあさもおもふまん 續古今 至秋つ
後 法丹 ゟく極楽世界に曼陀羅華のちるを見てよめるべし こく
○今按。此句きえとあるを見るべし。なかりハ後の人のこざかしく
書しあるなるべし。雲とありといひてハ。吹風のうれを志らねど
いふにうきをあらバ。何の詮なくれるなるなるし。是ハ梢の花を風のふき
ちらしけバ雲のきえゆくに似たる風情のおもしろきなり。されバ雲を
きゆるも雪とつゞるも風のあそびなるらるの観なるし。もし雲なれ
ちらしめるにしても風に見なし。諺解くはしけれどいふべし。
又曼陀羅華のちるも見て詠にハいかなるとぞ。

花ぞ中に

春ごとにかつもつらさぞ咲花乃日数そしいかなることよしれくおく

諺解云。月数にいかなるとハ。毎日なつかしくみるに。三月の月数ハ尽（ツキ）
こくも花ハちりて見せぬをいへり。むハ猶いかなれども春の暮る也。吉
野山のおくの花とハなつくさなし。毎年の春くれ行くこと。こゝ
○今按。諺解。三四の句を咲花が春の日数にいかなる心と見ける
ハ誤し。花がいかなるにハあらじ。吉野の奥がいかなるし。花の日数乃
内にハ奥までハえ見つくさじ。その心をいふにや。されバ花乃月
数ハ十日ばかりの事なるに。吉野山ハ十日や廿日もなかなかあら
ず。されバおくハ見えぬ故に。奥とハまださえぬなれバ
に。花の日数ハなくて花をつくすに。奥ハ猶おくまりて見残るなり。
諺解のごとく。花ハいかなれども春の尽（ツク）るに。奥までハなほつくさな
といふハ。春の理（ツヅ）まじかるべし。尽は。春がえしるとて吉野
の奥へなかつきないされバ花まだ残るべし。しかも三月の月数ハ

みるよりはと。花さへ移りておもしろハいかなれども入てみるべきす
ありけれど。此阿ハされどこそなかハよかるべし。但し讀解の作者は
此ま八。此阿より花は続きて傳へて。四月朔日以後ハ吉野山へ入る事
なり難きといふ禁制の有るにや。いとをかし。又春毎にと有
るを。毎年此春ごとに花にしたがう注したるハ。此一句詮なく
聞ゆ。先八年毎に今年ハなつかしきんと思へ
ども。いつの春とでもえならさぬといふこと多く云る文字也。

清子花入道大納言為家おりしてみよる新しき時旅窓哉

此春は月に山路はしるしまじ。しをうつに花のちるを見る哉

讀解云本歌 古今 としりして春の山べに旅する道ハ夏の内にも花ぞ
落ける 古今 貫之 家路は夜の此山路に旅路してハ落ちもみえず夏の
おらく思ひ出しが。此春はばば月の比花うつにちる花乃
ちる時なるべし。本歌ハ識の夏は中に花の落ちるをとまりを。今を
月にみる花うつてに花のちるを見ると讀る。古今月の夜も晴ま
るまじ○せし時ハ花のちるも夏の中ならしといふんをハいちらし
とこそ見てみるべし 云々

○今按。本歌には夏のうちに花のちるとよめるに。月の此山路に
旅路したるに。此春ハうつてにむのちるを見ると讀るも二三一と上
句を治せしたらんなるべし。當此本歌に對して此春ハ也。此春ハの詞ハ
うつにといふ所へかゝるも。月へかけて見るべからず。月ハ東也花の見るべ
よめる也。讀解には古今月の夜も晴まじ○せしといふをハいへるぞ。
此春八月にといふつゞきにまよひさまゝかゞとし。

将軍家にて春月を

月影のかゝりもあるを見えし春を花の陰しものおよはぬ

諺解云本哥てりもせず曇りもはてぬ春の夜のおぼろ月夜に
しく物ぞなき　千里　此哥ハかすむバかりにてくもるとハなきを。今
ハ老の涙にくもるぞ。かすむバかりなりし此哥にハ春をもてふべし。云々
○今按。諺解に。かすむもくもるぞを添へ。春と今夜のくもるがひ
をいつるハわろきが。此哥にてハ。くもるといふが即かすむるなりにて。く
めりもえてねとくもりまさりてするを添へ。春と今夜のくるまがひ
をよめるにくもりもはてぬといふ本哥のおもかげをうつしてうすくかすむ
をいふ。千里が哥もさることなれ。くもりまさるといふハ涙くらすとて一
句にみえしぬけたるさまなり。一首のさまハ。いま老の涙に月のくもりまで
くもるに身ても。くもりもはてざりし春よ春とおぼゆると。

入道二品親王家五十首哥に　雅

月ハあかずなりてかすみぞ原に来て春のなごりかな

諺解云。身ハまだ明やらぬ時にあれど。もはや深き夜。月ののこる
所の朝原に雉子のなくをきかれ。云々。野の原に朝の時にかん
ぞふあまり。又所に方にもなきをいひならはす声も有れ
○今按。夜ハまだ明ぬ時といふ注よろし。月の残れるハ
まべし夜の明て後いふ詞也。野原に雉をきゝそれバ暁に明て乃
ちなり。

春歌下

散花のなごりをこひしなぐさむる雲とや春の空のかゝらん
諺解云。春のなごりをしたしあれバ。花の別のかなしさをうるべし。春のこ
ゝろハ花ハちりてもまだ春のなごりハいづかたにても有ぬバ。花と
ともに名をよりて。花のなごりをしたしなぐさむる雲とてや。春の
まだのこらんといふ心也。此雲ハ間と(くもま)いふなるべし

○今按。此歌の心ハ。花もちり春も一度(イチド)に暮なバ。わかるゝ別れに
いとゞなごりをしかるべきまゝ。旅人の花の別をなごりをしむるま
での心ハ。あはれふかく暮まじきぞと思ひゆくらん。春ハ惜のこゝろなるべし。
詳解に。いづ方にても此ハ花も有べきと思ふよりてなごりをしむ
ふといへるハよろし。春の心に行くれど。なごりをしむるハまだ春ぞと思ふより
なぐさむべし。

浦霞春

由良のとや霞をわたるうしら船の行方(ユクヘ)もしられでくれて春ゆく
詳解云本歌「ゆらのとを渡る船人かぢをたえゆくへもしらぬ恋
の道かな」新古今よしたゞ　是にかなへ春行ゆくへもしらぬ方に詠し格もうつ
りきぬ　古今閑香　本歌ハかぢを絶てゆくへもしらぬ。此歌ハ霞の中
ゆく船のゆくへもしらぬ。是を浦船のゆくへもしらぬ。又春ゆく春乃

ゆくへもしられぬなし。しの字無方をうけてよめる詞也。心をつくべし。
○今按。詳解に。しの字無方をうけたるといふハむづかし。浦船のゆ
くへもしられ行くへもしらぬにハあらねど。本歌の心。ゆらのとを渡る船
人のかぢを絶たるぬくに行くへもしられぬ恋の心を持るべし。今の歌も
是に同じ格まで。霞を渡るうら船のゆくに。ゆくへもしられぬなく
春ぞくる也。更にぬくといふ詞を入れてん加る格。恋の歌なども多し

入原二品親王家五十首歌に

郭公そよりる雲にきえぬなりこよひ乃月に又やまたまん
詳解云本歌聞つゞけ鳴そよりる雲に入日さしこよひの月夜きえ
行かへそ乃奈。そよハそれ。とぶ雲ハ。時鳥のまつきゝなるが旗
雲に入月さしこめる空よ。一声鳴て過ぬるさへハ今宵の月の
あはれにハ必ますまで鳴べき理。又待て聞べしとぞ。

○今按。下句の心ハ。本文ハさこそ今宵の月ハさやかに清明(スミアキ)らか
なるべけれバ。さやけき月にハ又鶴子の鳴べきと思ひてまちて
居しかど。まだ此時の声を聞ずと思ひやる意也。清解に。まだ
鳴べき程に待て聞べしといへるハあらぬ也。さて本文ハ鶴句又ぞ鳴
べきとかへるべし。

基佐いまだ此ほど待しに五月五日節を下りて云
よみ侍し比菖蒲

こよひ又ねやにあやめをそへてむすぶ哉同じかりねの草のまくらに

清解云。草の枕ハいつも同じ事なるに。こよひハあやめ草を
あやめ草をそへて草の枕を結ぶ也。菖蒲の枕ハ本かりねハかりそ
めにある義也。あやめを刈ゆゑかりねとそへていへり。
○今按。清解に。草の枕ハいつも同じ事なるにといへる。むづかし
なり。同じかりねとハ。菖蒲の苅(カリ)根と。草の枕の假寝(カリネ)と。同じ
同じき故に。假寝の枕に苅根をそへて結ぶといへる也。さて又あや
めも同じ草なれバ。同じといふ詞を。草の字とへだてゝよめるなるべし。

治部大輔家にて早苗

一本
しのが里に雨をまちけんあの澤も田ごとさなへとるぞなる

清解云。つゐにハ雨を待て早苗をとるべし。されども此比ハしのがさ
とにて雨をまつらん。またハちがくのごとく沼田のある故にて。
さなへをとる程そはしとなし。
○今按。此歌の心ハ。沼田なる故にあれおかて。却て早苗をとる
ことなるに待て思ひてまつ。もかりがた故る田ハあれども雨に早苗を
とりかぬる地を。しのが里に雨をバまつらんぞ。雨ハまつまじけるを
なるに何として待らんと。此田の沼田なるにあのおかしきにあらしといふ。

よそめのなげきなれば田に衣をまつるを何やしとしるらんかし。諺解
一首の説ことをさへぐれば。ほ田といへるにかのつゆふぐる衣ぞすゝしけり彼
注のめくなりたらバ。常は田にても同じ事なり。

等持院殿左大臣家之首に衣字

かりになむ人[ヒトイ]しらぬふしぞ涼事は里乃名なくもなき比なれ

今按二の句。人ぶふといへるハきハめて宜し。道ぶふとある本を用
べし。もしかふとあらバ。人といふべし。こんといへるにハ氏なる
らでハなるまじ。ちなハ。まづ人にしていかゞおもんといふハいまださ
来ぬさき[サキ]なる事なれバ。もしよりくるべきまなし。されバ衣しぬハ
句法のすなはちや。道の衣ハ。人のかりに来べき所も衣しぬる
されバよくかなへり。さて衣ぶといへるハ。人の衣しぬハ木よりのごとし
むし。ふるまべき所さへ衣しぬのかし。諺解ハたゞてんまいきこま

うなる心をともされまへぞ。それんといへる本に鑑[ツヤ]てひゞちに注せり

前関白殿下少将清楽之首に蛍

思ひせく胸のこがれて思ふつゝあまりによそに飛ぶ蛍かな

諺解云。本にハ思ひせく心のうちの胸なれや胸とハ見えども声の
はしぬ 古今 三条町 胸つきの中にも涼ハ音てふをなど永き意の胸胸をも
なれなり。一二の句ハ胸のよどみに蛍の飛ぶを見て。此よどみハ蛍の
思ひのせく心の間の胸ゞと見ゆるなり。胸ハ涓の胸なり。さて蛍ハ思ひ乃
何とも鳴声もなければ地なきバ。本にハ声のはしぬといふによくか
なふなり。しかるにさへも声にもしらでぬに。まして蛍の涙の胸なきバ声も
はずえぞしらで。かれよどみにとぶなり。二四の句ハせくといふ詞をうけ
て岩のせく所にハかれよどむ地なきバ。よどみいふんとてせくと
いひ。思ひつゝふといへり。さて蛍の意のまゝで。思ひを

せく中也。夜の闇路の事をよまむにハ。よそにみるといへり。後
の本歌にハ。恋の闇路をたどるといへども。蛍ハ思ひをせく故恋に
闇が有て。その夜ごとにとぶといへり。蛍にハ火の有るなれ。おもひこひ
と火によそへて詠る歌なり。音もせで思ひにもゆる蛍こ
そ鳴虫よりもあはれなりけれ 後拾遺 重之
○今按。此歌ハ忍をつゝむ歌なり。よどめる所に蛍乃とぶハ。此本
歌にいふ所。思ひせく心の内乃滝かと見ゆるとなり。思ひせく滝とそ。
本歌に思ひせく心のうちなりと詠る滝をさしていふべし。さてせくと
いふに叶へんとあふによどむと詠り。歌をせけバよどむ所ある也。
さてその夜の闇路いかん料に忍つゝむとおもふ也。忍の思をつゝむと
づハそれありてよどむ中に秘める也。さて蛍ハ思ひにもゆると
常によむ物なれバ。その蛍をやがて思ひよそへて思ひが歌のよど
みる所なりゆるハ思ひをせくに似たれバ。此本歌にいひそゆる也。
思ひせく心のうちの滝かと思はするよし也。蛍の思ひをせく滝とい
ふことにハ行らびし。此所まがひやすかるべし。又蛍ハ音もなくの歌乃ごとく
音もせで思ひにもゆる物なれバ。本歌に音の聞えぬといふ所をとりたるなれ。
されバまでも有まじきなれ。されど[illegible]をそへたるかんもいかゞ
千載に大納言経信母 孫にもてるしや思ひせ
くゝの滝の玉とみゆらん。よく似たる歌也。諺解。思ひせくを蛍の
恋の思ひをせくとみゆる故に。ここに泥まり。されバ滝ハ涙の滝也
といへるもよろし。又たゞ恋もあるにもしろなにとハ。何をさしていへる
にかおぼつかなし。又此歌に恋の闇路のさまを一句によそへたるなり。さ
れバ闇つゝむ中にも流ハさしの歌もて心に引べきにかくれ。

篤指院勝左大臣家納涼

まれつる声きくさへに松陰のいとゞあつさもすゞしかりきなと
諺解云本ゟおもふとも君ハおもひながれつる岩かゝるあたりを
しらしねむこそふさはしかるべきに涼しき松陰に岩ねより
ながるゝのおもふるゝ声をきくさへ涼しき也。さへといふにむねをとゞむ
しるき声をきくさへすゞしといふ心なりけり。
○今按。三四一二五と句を次第して心得べし。声きくさへにを諺
解の後乃注のごとくむねをかけてたゞ声を聞だにさへ涼しき
ありさはかりもすゞしき松陰にといへるハいかゞなり
中園入道前太政大臣家三首納涼
いづくより涼しき風の吹くらん日かげをハもらさぬ庭乃木陰に
諺解云。庭の広き木立しげりたる陰なれバ日影もゝらさねど
しらにいづくより風のかよひ来て吹にや。一入涼しきと也。日影ハ

もらさねど。風ハもらるゝといふ心にかなへり
○今按。むねハ日影のもらさぬ程しげき木立ながら
木本陰なれバ。風のもらざる所もあるまじければなるに。風をい
づくよりか吹入るらんと。涼しきあまりにいふ意なり。日影ハ
のハもじといづくよりといふ詞にかなへりべし。諺解。一入涼し
きといふことハ。ただ全体の有様ばかりを注したる物にて。日影ハ
もらさねどといへるが作者の趣向なり。そのいづこの意なるが
全体の本意をば裏にこめて。作者の意の趣向を表によむ
物なるをバ一首の作の勢も表の趣向に物を添へつらねたるなし。その
木立繁り本に日影ハのハといづくよりといふ心をつくべしとハいふ也。
然るに諺解ハ此よりちを會得せざる故に。裏にかくされたる全体
の意をのミ書しるしける。表と思ふ所の趣向をバ。却てもらせ

らになりて。よしといふなるかぎりなどいへるハ。なかなかあしき注なり。
なりけつとあれ眼にてハ。まどへるも。ことは善悪ある物におもへり。
古言の善悪をしらざれバ。いづれもよしとおもへるなるべし。さるハ
まづ言よろしからずハ。よろしき古言をつかへとて。一首のすがた
詞のたしかなる所。何のつゞきがらにてかをはのおきやうなどを。くハ
しく味ひ考へて。そのいひざまのたがひありて。そのよき本とし
たる所は古言をよくしらでハ。かなひがたき事なれバ。出来ん
ハ一定なり。故に此集ハ今の代におよびても。詠格のよき本とする
書なれバ。よく吟味すべきことなり。然るに注釈のよろしくてハ。其
何の言を撰びたるのかしれず。末代天下の人の言をあやまらしむ撰
べきことなれバ。其害いとおほきし。されバなるにさるべきにいはれ。此
集を読ん人。必よくよく思ふべし。注釈の佳否をえらぶべし

て見べきなり。さて此つゞきにおいていふべきことあり。まづ今の
世の歌よみを見るに。人の歌を見ることいと甚つたなくして。実をしらず
の佳否を弁へたる人ハ。百千人の中に一人もありがたし。是何ゆゑぞ
といふに。全体の心得あしく。ならひしたがひたる故也。心得のあしきハ
古人の作るべき人の歌をみてハ。まづ其作者の名によりてしるく。さぞ
よき歌なるべしと始より信じてゆゑに。いかにもあしき所ありても。いか
よろきにいひつくれ。おしハかりてもしかじ及ばぬことのみ心得て。させ
る事もなきを称美し。或ハ其人の心を見ずして。歌ぞといへども。それ
らず見やうしじと信じて。みづから考ふることもせずして。人をもゆるさず
し。又さしも世にしらぬ人の歌を見てハ。いかによくても。是よかれといへ
ることさへもせず。たゞ其の人の歌なれバ。さまでの事なるべしとおも
ひあなどりて。深くも味ひ見ず。なまじひに作者の名にのみ心をいれて。

實におのが心に出てよく味ひ考へみるときハ。自然にいかにも眼ひらくべし
て。その善悪を見分る程の力ハいでくべし。されバ教る人も学ぶ人
もこゝろながく誰だらくのなかりて出て。先をはかりしくるべき人なし。
いかにも恩あるべし。其時人にてもいふまじめく。或ハ人によるね
におもしろし。其人ありとバよくて必よくよむべきなり定まれる理らも
なく。又よくよむ人なきバありて。或ごとによく出来る趣にも
又其人其家にいはしびとして必いつしかるべき理らもなくしかしもな
き人ありてもわかくにハよれ其の出来まじれ趣にもいかしび。此所
をよくし考へてしるみひ人麻呂貫之の其よういふなり。人の其の
こゝろ使におしてこゝろにハ信ぜしび。実によれ其のしきれとくづら
らいかぢさらしこゝろならる趣なし人々も見ひるなし。おのづから眼あ
きらかに成りく。作者の名にハまどハずきこえざりし。此所り

まちがひ人をおそるゝ事なしハ。古来名人の言といへども。しかし及バざるか
このくらひ恐まてしみをつきまで。新らしき事に信ずる事行るべから
ず。古今きらしく悔る事なく。是ハよれぞ是ハまちがきぞとしく考へて
悔ふるに褒貶批難しててるべし。ときしかるし。かくのごとくしき
まバおのづから人の気をみる目を驚きしまてし善悪を見分れま
かる事なる故に。作者の名にまよひてこゝろの外に信ずるの
誤なし。人の気持よしいはしきをよくうれ出来る時ハ。或其も歌が
こゝハよまぬなし。終にハ今の世始其よとし時。人の其をみるまでも
よきしこゝろをもよれ其をさえよまなハ。かりし此んをおしくあ
りし時まろき所にして知べし。程此所にも近代歌よみ人をおしく
まよへる事なかいまだ隠しきさらハおおさりまで。いかなる華美く
でえん人もいかさりなべきによりて。さあらハいとなず。それ別に

くりしく論なしとおぼえ侍り。

續草菴集玉箒巻二

本居宣長解
稲懸棟隆
須賀直見 校

秋之部

入道二品親王家五十首歌に初秋風

梢にハ一葉のこちる秋かぜにしかんだかめつきハあまりざりけり

遠解云。秋くれバ一葉づゝちるに。一葉飛テ知ル天下ノ秋ヲ 淮南子 と云し。秋風吹そめてより。梢にも先一葉ばかりちるに。或ハ秋風のふきしくれバ。或ハ風ハそれよりもさそひ落るもなくちる故かるくおつるといへり。云々

○今按。しかんだハ不堪タヘズ也。秋風にたへずしてえちらぬへだして風のかろくおつるに。遠解に落るもなくちるといへるハよろし。

しかれどもちるハ借字の誤としるべし。しかへの假字也。一条に對して。
渡るなく多くおつるとみん人も有べけれど誤なるべし。

等持院贈左大臣家七夕七首哥に

まれにきてうらこそながれや七夕の天の羽衣しかちかへつらん

諺解云。本哥云ながらよハ天のかはらもまれにきてあかつきなバ
わかれなりけん 拾遺 撰にまで逢なれ恨むまじけれどもあれバ。
ゆるさぬハまれにこそたまさかにすれ恨むらし恨みてもちかひまるべく
やうやうなれゆゑ。恨ながら立かへる也。まれにきてハ本哥の詞也。き
てうしろ立かへるいづくも衣の袖の詞也。
○今按。しろとながら立帰るとハ。年に一夜まれにきて行に中
なるなに一年経る行を恨月日につもる恨をいひつゞくるうち
に。ちや夜の明ぐれいまだ何のうらみもせで。恨ものまくるて袖

歌をいふ也。新後拾遺集に入。一品親王法守七夕の哥も恨とも
いふしこと一夜の詞をしいひつくさん。此類の哥おほし。考へ合
せて知べし。諺解説云をみれバ。をさなるなれ誤也。

同し家三首庭荻

秋風はふきしくまゝにおのが時庭もうちちる荻の音かな

諺解云。吹しく二説有。云く。此哥義は荻ハ一本二本そよぐ
音さびしきに。ましてあまたなれバ荻のうちちくるを風の吹
しく成つへうれ也。又さびしの荻あまたなり。秋風のさきうらにふ
くゆゑ。庭中に荻の音はうちつゞくやうにする也。此時ハ音さらのを
○今按。荻ハ庭にうちて八方へみだれて風の吹あふゆゑに聞ゆるぞ
とあはれ。音ハ庭にうちて吹るとつよかる也。多くハ義なり。
吹しくとうちふるとをてし合せて見るべし。諺解のごとくなり

ゆゑに萩のうへちらくしてみえぬハ。吹しくの詞かきたがひあしく。
見ゆまじきにしたる詞にかなたれど。二三句の句詞つゞきをよくしたらば
ちらべし。又後の説ハ。吹しくの心をとぐべきなに。うちちるのかきあひ
しらさしれど。さて庭つもりおきしけるハ。風の吹しけしけるまゝにて。つ
くろひなどもせぬさまをいはれたるなるべし。但しまゝにといへる詞ハち
からておきしけるにかゝれど。其ハよくたのめとしたる語也。

聖護院二品親王家にて歌奉り

文殊 萩にあらゆく秋や小萩かりしに風まつ程の露ちらすらん

述解云。本歌ハ。霧やまきの下にたるの小萩露を。おもと風をまつごと
見るをまとて古今秋歌例云々。文殊法師の小萩の露を下風
を待く心ある所に。秋歌露の趣をたる也。萩の風まつらまし
如くなしうらしこし。云々

○今按。風まつ程とハ。まてどもいまだ風のふかぬ間をいふ也。いまだ
風ハ吹ねども。既に秋歌露が落ちまふらんと詠る也。述解に
萩の風まつとなる趣をもつてよしといへるハ違ふべし。まづ此
歌初句の名けりど俗にをとゞ有べし。並べて秋雨の如く下さる
差別をも知ておくべし。如くいふ時ハ。まち雨へきてゆくきこ也をさされ
バまち雨をまつまこと。云ハ文殊法師へをきしてゆくにハおよばれ。文殊法師を
秋待つる露といふとするまゞハ。必を有り

八条院二品親王家五十首歌に露

さとしかぬ露にも何たる秋の色ハなしこのごろや見えたらん

述解云。露ハ何のいろもあれ物あまれバ。秋のよ秋もよとしてうつりもある
まじけれども。素に何もねとハいかさま見たれ物あらとも見あるらん。さきる
かともるはハ知るへに見きくてかくりけるひなきて。世に物を思ふかる

有まじけれ。露ハ老の涙なるに夜の長きを侘しくおもふ。まして
兼好ある時なきをバ。何の慰も添く物ぐるしきに。ふもとかひ。のと
とつひぞちらんと云詞に心を付て味ふべし。
○今按。本歌あり。古今忠三躬恒長しとも思ひぞはてぬむ
かしより逢ふ人からの秋の夜なれバ。逢人からの秋のよとハ。あふ
人によりて秋の夜もみじかく思はるゝよしなり。思ひぞはてぬとハ。なが
く秋の夜ハ長き物なれども。逢ふ人に逢時にハみじかく覚ゆれバ。
長しとも長き物とさだかにも思ひさだめかねぬといふ事也。さて
今の歌ハ是をとりて。本歌にハ思ふ人に逢へバ秋の夜も短きものとさだ
かにも思ひさだめぬとよめるが。兼ハ思ふ妻にあはぬにつきてハ。秋
の夜をながくながき物ぞとのみ思ひさだめつる由ぞやはらんと詠る也。
諸解本歌を考へかしこせる故に。のみといひ思ひさだめんといふ所

をえ心得ずして。あひもなき義理を付たる物なれバ。ことごとくたが
ふ事にて。何の本意もなかりけり。すべて歌をよく見る人ハ。本歌を
とりたるハ。ゆるがせにせず本歌を考へて心得ねども。先ハ必本歌
有といふ事ハ。何までよく見得る物なれバ。古き本歌を見付ね
あひざハ。みだりに注せることなし。然るに諸解ハ。本歌をとりたる
歌ぞといふことをだにえ見ずして。味しらずをさぐりに義
理をまうけて。心得がたくして初学の人をまどはせる也。

中院入道太政大臣家にて月歌よませ侍しに

風ふきて雲ハ行へなくなりにけり夜はさえまさる月の影哉

雑註に書まがふべし

入道二品親王性助家五十首歌に

いかにして月ゆくつゆの一本ハよそに行方涼きりぞとゞまらん

諺解云。月の桂ハ只一本なるに。その影のいかにしてか。天地四方
にあまねくてらすぞとゝ也。月一ツの光をいふ也。云々
○今按。かげハ陰也。されバ樹にハ陰をいへバ。表の影こそハ桂乃
本の陰のことなるべし。月の影のさまハ裏也。然るをよく知べし。

等持院贈左大臣家云花に寄月

むさし野や雲をも拂ふ秋風に家ハのこりて月ぞやどれる

諺解云。かりたる孫ハ家もみえしに。雲晴て八月の
明らかなるにつるなり。家もよくみゆるを。のこりてとよめり。風もなく
なくて月のみる光に雲をバ払ひしまたる月のやどれる家をハ
のこりとするといふにも有べし。
○今按。諺解ミナ然がるべし。家はんハ。並べて家も露ともなに
風吹ならふ所なるに。今ハ月のさかりになる雲をバ拂ひて。

家ハのこりてふに晴たる月ぞやどれる也

八月十五夜よみし所に月前露

家きよき秋の夜あかで萩の葉にしほくる光もやどる月かな

諺解云。光きそふとハ異(コト)殊(コト)の字也。光乃ちぐさにて明らかなる
義也。云々 秋の字ハ八月十五夜也。萩の葉の露乃つきぎよき
そらうつりゆきバ。月の光のよるもの行にうつるなる也。
○今按。八月十五夜よし家の清きといへる。古詩などによ
りあるべし。さすらひてハ上二句よし。まだ清きぞ今も
まちにハ只此ゑぞ楊貴へ行べきなり

入道二品親王家十首歌に月前虫

梅乃花秋露にしほれて草葉ハうつりまで虫の音ぞきく月影

雑須にたつかふるし　此歌総句月影にそのむに出るより

八月十五夜将軍家にて　橋下月

なかむ月みやこさかる山人乃出つる海の峯にうきたゝし

後解云。みちかるハ海なるまでなり。みなかみし。さて山中に住し人の
二度無橋を出るといふ也。たとへむ身にいでしと聞しといふのまゝに
か橋をこえてうきよに出つる頃には月の海をてらす也。新ぞ乃
ぞりじいでつる時つるの字にかをつくへし。さて

○今按。山人ハ樵夫也。その人ハ樵夫の家路に帰るさて。夕暮に
峯にかゝる橋をこえて山を出つるが。ここ海をとよハ文月新が海
家にて帰る也。樵夫の山を出て帰るハ夕暮の事也。月ハ夜の物也。在
に出つる海をいへり。後解に山人を山住の人とみるハ大に誤也。
二度此橋を渡りてうき世に出じとちかひしなどいへるいつく
にまかりけんハあやしきぞ大なるひがことなりけり。

聖護院二品親王家にて惜月

八月まてしばしはなきのやすらひもやゆふつけとりのやすらはん

今按。うるはしのやさしきまりてなをはなれハ夜ある也。下
のやハぞなるべし。

民戸て家一日子ざ寺に鴫

深のかたる田面に立てしぎ鴫の数ならでおのがよそぢ

後解云。立鴫ハ田上に立て居る也。飛立につけていふ

○今按。しかつハ飛立也。そのかたる田面中なるも。夜の明るに
つきて。そびたる鴫の数としられぬたてて来るなるべし。後解に
立て居る鴫といふ物ハ倍なし。立べて鴫鴫のある所がの
がしハ。立て居るをハかるとこそいへ。立とハいはず。文意聞ぬ
よの中なり。是も高く飛ハ。立て居るを立といふ也。同じく

なる物によりて。立といひ留るといふハ。見てゐる所につきていふ
なり。すべて歌ハ何れの所に心をつけざれバ。あやしのしわざにて
俗めきたるにおちぬ。古歌をよく味ふべきなり。

湖上月

伊勢の海の底まで清くすむ月の光やしづむ玉と見ゆらん

諺解云。伊勢職中也。底に沈月を玉のしづむると讀り云々

○今按。伊勢海にしづむ玉とよめるハ。万葉第十九伊勢の
海に逝遊の時家持蜀波の陰なる海の底清くしづく石を
玉とぞ見ゆる。光をよりなせるなり。

入道二品親王家五十首歌に

もれくる時雨はつればみな菊は千入の数をみせやるらむ

諺解云。晴くもるとハ。時雨は晴ぬ曇りつ晴よりもるなり。時雨の降
ごとに菊を染る故千入に染むる度の数ハ。時雨の度々
ふる毎にいくしほか深るとしらぬにみえし。大方千入の数までも
見るべきことなし。さすれハ千入のかずもえ見ゆまじ也。又千入乃
数ハ度々晴くもりする時雨がするべきといふなるも。かくよりハ見ゆが
しかきなり。

○今按。晴くもる時雨なりけれバといふハ。かつ晴かつ曇りた
らせば猶さらバといふまにて。よの一つの雨の中に降りつゞきて
ふる物なれバ。いくしほ深るといふ数のしらるべしと讀るなり。
諺解。一二の句にかゝりをそへさしたれど。二説ともに君が
精件なし。又此哥題林愚抄に嘉喜成でちぐれ曇る時雨
なるとあり。紅葉は千入の数をいへどさもあらじ。先と合ほど

暮秋月

かくぞしる秋や全きなる夕日影にかゝる山より出る月影

諺解云。本哥夕日影にさしつる山にてる月はかくれざる空を山ごしにみえて　万葉。夕日のさし出て残月に映ざるおもしろきけしきの名残をしきにかくれてや秋も暮なんと。秋の心をおもひやるべし。きんとかけるも同じ心也。此きんハ心なきなんべし。

雖注云。かくぞしるとハ不足なるをいふ。源氏に多き詞也。諺解不足なる義と注せり。湖月にむすぶ手のしづくににごる山の井のあかでも人にわかれぬるかなといふ詞也。古今宗祇抄云。浅き心なきハ又むすべバにごりて満足せぬるを。かくてもとハ人にあきへいとふると注せり。此の心也。秋の暮けるを不足してや。月は出るに月影の誠るかとあり。誠るといふハ。秋の暮けるを満足せばしてや。月影ハかれ誠るといへり。諺解のごとく月の影が秋をかくしてをしといふ義にハ

かくしるべし

○今按。二の句。暮なんとかける本を見べし。なるハ誤也。きんハ全なるといふべし。夕日をよみては暁に十月頃の夕のかたにあらねバ。暮秋の空にかゝれバ。ちよろへ夕日の月ハ日と同じく夕出る猶あれ。ぞ誠るの詞もかなはず。必暮ならずにハよむまじき事也。古注ハ九月下旬のころにて。夕日の影の映じたる西の山の端に。有明乃月の残りたるけしきの面白きを見て思ひつる也。かくれたるにてハ晦日をかぎりに秋の暮れたれ。さてかくぞのかりおもへるんとかりて思ひやりたる連歌本意の詞にてあきてたり。かくぞ八暮心にかくぞ思ひけん也。諺解にかくぞを秋の心にかくぞ思ひてや暮なんと見たるハ誤也。又二の句なるのかたにつきて。きんと書も同じるなりといへるも。ちきに過ぐる也。なるときんといふぞの同

じるらめん。此らめんハ未来をかけていふ辞。おもにくるしくい
つるべし　雑注。あらずしてハ不足なるをいふといひく。不足
して満足せざしてあらざく注せるハまぎらはしき也。されバたゞべく
何かねといふハ。此方ハ人に十分なるを。まづ不足なる也。物乃
不足なるゆゑにハ何しるゝ。されバ同じ詞なれど。不足に思ふ満足
せざる思ひてと注せバかなふべきを。不足して満足せざしてと注
しては。其物の不足なるにあらずかり。此方にていはゞ。秋の日数
の足(タラ)ざしてまたりゆるに思ゆる也。其物ありつきていふと。此方の
心よりいふその差別をよく見れまふべし。源氏まはりの抄注にも多く
何するも。誰にも自然なることをはゞかりすなりて。此方ハ人に不足に思ふ
なる也。此詞大抵しかるも人にはよりるなるまじ。何も注せぬ注解
の方ハ雑なきを。雑注のごとくにてハ却て人のまどひとなるべし。

又一首の心。雑注にも二の句あるの方ハ見えて。秋の夜ながきを月かの
見えずして誰人ともなるも謂ふ也。それハ名に立てやぶく。彩月の孔乃
月をあらしいふなれバ。全体の人にしるべきなし。或人同(テ)
云。此方の日影に立て山といふハ。東方の山として明けくる様に述る
月いでバ着ふ本方にてハ東方の山也。継るを阿ハ其是を西方
の山ともいふ。今の方もありといふにといふ。ありかの方生の
本方に照月(テルツキノ)乃ともいふ一句ハ不厭(アカザル)の序にて。并十二首にも照月(テルツキ)
不厭君(アカザルキミ)と諸る例あり。それハ此一句ハたゞ何かうる詞へ行(キ)しる
の序にて。其時の景にハ何か見る也。万葉にハさる事の例つくのなる也。
其心ハいふ。彩月の影にる山より何かまする君と山でしにおまさる
といふなり也。されバ山ハ山より東方の山なる其かうをえらふなし。
然るとその心ハいさゞ万葉集来にらぬかしりかね時代なれバ。不厭(アカザル)の序

ゑくいふるさを初めでゝる月をもます時の景とみて。ふかへる山を
西の山と心得るなり。されバも彼集に骨を折し仙覚が抄にさも
侍めれバ。まして此何も思ひ出るべし。光を西方の山とせし。ハらく
ろよろしきりたりあれども。東方としてハ弥日の出る山とせる月似つる
もしうくねバ。思ひ出すをえざ。ふかへるを西の山へ映ぎるすと心得。
月ハ神無月とみて。今の歌もまた心出てよめる趣なり。今此歌も
東の山などいへども。出る月といへるのみならず。又本歌を弥阿の西の山と
心得ざハ。ふかうくも西ましてハよむまじきなり。これをかへてと
歌ハ当分まさども。あまりによまべし。　此歌親といふて二つありゆる
まさりげりにけるば
入道二品親王尊円五十首に
初時雨ふりにしより神無月雲も嵐もかはるみねのか

諺解云。神無月になりても。まだ秋の色のさまにてかはらぬなり。
初時雨のふりしよりハ。同じ雲の色なれども冬の色。昨日ハ秋の
やうにもなく冬乃色に変じたるなり。云々
㊦今按。初しに染しのこをりまもりまで時雨の降て染る
にハ。木の葉ハ色のかはる趣あるに。是ハ時雨のふり染て。雲風ま
でもかはりつと。初時雨の時から空のけしきのかはりてゆくを。染
るとみ乃かはる方にとりなせる趣なり。諺解いかゞあるらん。
贈左大臣家和歌社にてよまれし三首に冬月
霜の上に落葉吹まく風さえて杜乃木の間に月ぞさえける
雑談云へるかふべし
和歌眼目抄
みだし家ちも吹のしばしある月ハ影をつくる山路しぐれの淸せ

諺解云。石ばしるハ。滝の水が石の上をはしる也。され石のうへを
はしれバ音が聞ゆるに。別して夜る日にてハ行り。下地ハ水の
うへなり。音上をつたふゆゑ。流る肉にもちや一方かく自然と
こまりて。ざぐとも何く水の音も高く聞しなし。水が出
ある有様をよくうつしかり。人を付てみるべし

○今按。前句んハ。つめにハ石ばしりて音高れど聲つ響も。冬
のさむる日ハ大方こまりて。玉砂のうへをもづかふつゝひつ流る
ふ有ふいつもの中うに石ばしる音も聞しなとし。諺解ある
肉にもちや一方かしこまりてなどいへるハむずかしき也。

夜細代

月寒し夜や更ゆらん田上や川音高し響く鵆あじろぎ

今按。月ハ風の字を写し誤まりたるべし。月寒てハ寒さの主もじ
わびやかなれバ。下句の心を含も見し。風寒てよく冴まわり。風寒
きハ。雲の寒さにもといふことし。此みれど鵆の声に釣まても寒き
といふに。風の吹きしきんわまバ。雲の吹きしきりに河音の高れと
よめるを何ぞよかし。

石山座主僧正の坊まて聞霰

桂の屋ましまぐし猿の声もなくやがて鳴りしかる霰ぞ那

諺解云。桂の屋ゑて霰をきくに。時雨なるも猿声よくよく鳴
ふ物あまき声。そまてあつりも何いきハ猿啼く啼く。鳴る声ハしく
時雨乃るわびもなく。おし鳴るに鳴る也。此猿ハ間の心也。時雨の鳴
申し霰のふりしかる作也

○今按。諺解のぬくゑてハ。声もなくしてある時ふうかりバ。先ハ桂乃
屋まて峡する人にハ何かし次。石山僧正の坊にて。実に霰鳴ゑり

しるにつきて。手影をまうけて。即そこにて申しける人を讃る
なりけり。一説にハ。霰ハ時雨よりも音強く紀路なりけれ。
○又ハ大厦の坊なる衣に。檜の屋ありて時雨を申し我の音もせ
ざりしを。そのまゝ霰なりと云。檜の屋ハ板屋檜なれバ。時雨霰など
も殊につよく打あたりて。音高く殊にうるさく。此坊ハ大厦なる故
に。霰なればとて檜の屋の時雨の音などにも申しぬと讃て。行る
じへの挨拶をこめしなるべし。

入道二品親王覚性五十首に

霰のふる楢乃かれ葉にも音たてゝ枝に一むら帰る行かな

讃解云。楢の枯葉の霰のふりける音に。霰の音しげくなりけるを
ありけるを一むらふると讃り葉乃一むら残りける枝にふる故。そ
れなるを霰の一村といひける。讃し得たる体也。

○今按。枝に一むらふる霰とハ。楢の葉の枝の一むら残りて
ある所ばかり霰の音して。他の枝にハ葉のなきにバふる音のせぬ
故に。よその枝にハふらざりしてその枝ばかりに。霰もしばし一むらふるや
うにきこゆる心。霰ハ所をわかでなべて一むらふる物にハあらねど。一む
らふるとよみける讃きこゆ。讃解此説をえさらしとぞ。前の魂ぬ
きたり。三句の句をよく味はふべし

民部卿二條家おしわがふるしておもふ所よかれしとぞ。嵯山
宮ふる雪そしかし此一度太閤今実白の御點をも申侍し
おくにかの葉を云しと行そぞしてくる侍し後。太閤に参
りてよふに伺ふにきくと御判をくへられて。猶よ
嵯山宮のよろしきよし。太閤への御書にのせられ侍
しを拝見しておやへ侍し

ゆふ雪は山もしろくつもりきて見えし様なる詞をよめる歌也
諺解云。山もしろくとハ。しハ助字にて。山も白くし。山もたかにとい
ふ心じ。山のごとくといふ義也。降ぎれる山もしろく成ぬれバつく
づ念のこぞまけつゝ見ゆる。古今。大夜は浦吹峯によりてしろく
ゆかしおぎ。大空とかに及びしるを。雪の山のやうにしろくつもり
ゝるにぞある也といへり。下句ハ。ゑ所におゐて。野中ゆれなる作製
をそへむまゝしるすを詞にいへり。詞ハ色の詞乃義にて。作制衣に
物象を染なしたりしるすも。雪まハ詞の省略なれバ。そへていへり
○今按。山もしろくハ。山と白くといふ事にて。しハ助辞なり。
年ふるくといひかはる趣也。古今の歌も同じ。括き新古之論
鷹へものかりやしきん古兆山山より高れよみひ出る人。一首
の家ハ赤人の年ふるくつもりまて。今老後に至りて。家なし

おきてまれなる歌をよみけるとぞ。歌ハ倒といふん
ぬて。物事を隠しなるるを裏にてあらはして袖白にふる雪の
とおきよる八。つもるといひ歌といふも料。又見山雪の家を作
賞美をし。手料てよみれバし。上句は見を諺解の如くぬて八作
ゆりきてといふにかなはず。猶まりやがて大夜の作る事に雪なる
まで照る作にちりぬ年ふるくあつむる雪は山のうひとハとあ
ふふても然べし。又詞を色の詞乃義といへるもつるなし。色の詞
ともそ作るしといふハ。文字は始のるすあまりども。常に詞と
ぢいりいふハまん心にハ行るにと。手詞といふまでのすこし。

民部卿家一日千首に雪

山里ハ詞つきぢくふる雪に今日こむ人しまつきもやハなる
諺解云。山里ハ詞をつきてもそらひがるは経深く雪のふるに。

大体の雪にこそ人もこゝろしてまつべけれ。無下の大雪にハ人も
とふまじけれバ。来ん人をまつ事もあるまじ。一向に思ひ絶て
くらすべきに。深き雪の体をよめる也。けふこむ人さへ。此雪の
面白さに今日ハ必人の来べきにもと治定して待心をいふ。
まされやハあはれとハ。まつ事やハあるまつ事ハあるまじ。待てもく
まじけれ独すしとよ。無下に門におも待心ハあるべし。
○今按。本歌拾遺集兼盛。山里ハ雪ふりつみて道もな
しけふこむ人をあはれとハ見ん。是をとりて読り。道つきがたく
ハ道つきんとするの惜くてつきがたかれし。一首の心ハ本歌にハ雪のふり
つもるにつけて。今日来ん人をあはれとみんとよみて。人をま
ちかねたり。我ハさばかりにまつ事やハある。道つきんとする跡迄
待べバまつ事ハ世ぬと読る也。諺解。本歌を考へわかち成べし。

四の句の説あしやうなれバ。又道つきがたくさ。道をつきてもとらひ
がたけれ独深く雪のふるにて待しきりしきこんあらバ。ふとく
がたくとか。何もあれとしか読べし。道つかる付ぬのさたハ何乃
詮あくいとまつ事あれなし。然阿ハ無下にまつ事あれするをよ
む人にはゞかりなくべし。近代の古人ハ無下の事にまへをよぶ

河辺雪

よし野川しがらみにこそあるらし吹まく風に雪ハふりつゝ
諺解云。こゝろハ水の泡也。滝の白浪落る所にハ白の泡の白に
まへに風の雪を吹まく也。こなたよりいふくしろく見ゆる也。
○今按。此歌雪の題なるに実の雪をよめりとハ見えしだいだ。歌
の心ハ吉野川にいはなみの立をれつるを。風の吹まくが雪の
ふるごとくにて白くみゆる。実の雪にして見

あらしハ。あらし入り吹まく風にとハ。風のはげしく吹まくにかかりて。こゝろもの
みだるゝなるべし。三の句四の句引つゞきてみるべし。然らざれバ三四のつ
づき穏ならず。まて吹まく風にこゝろみだるゝ所へ。又その音
の外よりほかなる音もみだるゝこゝろ。まれど詞いひよらず。言くの
それども穏ならず。其袖より四の句とに。おしと音によし
なる詞ハなくて。しかし山川のなかれをあつむるに。結句にまとめてにハ
なに音ハ随つてといへるなれも。より所なく当時困るといふに。これ
音ハのハめじハ古今秋下秋ハきぬれど紀にハ雪ふかりしきぬ
こゝろてよふ人ハなし。抜書意一闋せん。今ハくだり有補を意を
見すまじく人ハつきなし。玉葉秋上有家。秋ハきぬ兼ハ尾の人
にあらぬつよさもわねはあきをみふ人ハなし。こゝろしるハ格をおも
へるにや。おもふハそのじを二ツ三ツ重ねる。一ツ毎(ゴト)に詞もきつく

一格也。今ハ此格にもかなひがたし。　渡解に。風の音を吹まく
といへるハ宜し。又音を乱れまくゆゑこゝろもいよく乱るゝ
といへるも理ある(ひ)がたし。

前冥白殿まで　湖雪

あかぬうつくしやなる音に一本ぬ松ものこるぞ花まれに咲き

渡解云。おなじ意なれバ本ごとに咲ぞ咲にいふいづれを梅とも
てまうまし。古今。今の音に志がら浦の名ずく乃松。一本も
なからん。あたく花の咲しるし。辛崎の一本松ありしバ。その縁
まてよみあり。辛崎の一ツ松ものこるぞよきに問ふ
ど。まろふし一ツ松のありしバ。おのづから詞のつやに恥るとし。や
うぬ所に気味のあるゆゑ。から崎の松にまし何てみれバ。すべ
つにいはゆく。あれ風雲林何しい。地下風の高ハ無ぬ所

さしにてよしあるを論じたるなり。されバよろしからん。此故に
くせのなきもんをつくべし。
○今按。一本の松ものさびしとハ。外に本無に花ぞ咲にけるのことに
て。諸木ことごとく一本ものさびし。此一ツ松までも花咲けり
といふことにて。一本をやぶて幸崎の一ツ松へいひかけしなる
あし。淺解に。からさきの一ツ松も獨りさびしくにていふにあら
ず。さらに一ツ松のうへバ。おのづから詞のつやにあらはるゝといへ
るハからず。先ハ諸木一本ものさびしといふを。即外一ツ松へい
ひかけたるなりをえこゝろえぬゆゑに。一ツ松の方に定めたることも。
何とやらん一本ものさびしといふ方にもゆかしくおもしろかりし。み
づからもまよへるから云出せる説也。此所ハ志賀浦のことをよめる
ゆゑなるに。からさきの一ツ松に何てかんが何のてづからあらん。

おのが見様のほしきまゝにて。いづくにも風体あしからぬやうなるを
むねとしたれバ。却て地下風なとゝいひて人をおどすハ何ごとぞや。
すべて愚昧の輩ハうちつけ詞に恐れて。ゆへなく信服する癖ある
ぞかし。其の語をよくしらざる人ハ。ちかになるぬべきなるをなきバ。なかなか
我の恥をかくすといふ癖にて。すべて淺解にハ。みづからなしあた
はざる事をバ。まぎらかしく工夫して。あやしく理ものれ説をまう
けたり。却て手柄がほしくいへることおかし。ちんへんへ申さるべし。
雪はふりつゝしかし。嗚呼尹文より伝りきたりし何ぞこしふ
りしとみきど降雪は後ちかれにてさうらふがきこゆれ他にし
なる雪にふる松のうへかきばいかぶりかなるあとなのなりけん
淺解云。此雪に家へきかぬにつきて。係なき志の松のあるかき侍
らバ。来りも路なくへきし。されども私座のことなきバまゐり侍る

さもいかバかり時めかしの詞かくれしやべきといひしく。当にこゝろなる
くてまゐらる上にてこそ侍れ。其る程に志の深き。其るなれども
志の淺きとやハ。表向のことに侍り。まゐらねどもんざしにか
かゝる事ハ侍れバとぞ。語とハ事時を指をさしていへり。事迹乃
美し。それ宜し。宮にみへぬ詞の何とよりして。縁の詞なきハ
あさましくとも。唯今詞をつけてそふとましていへる云にハあるべし。
あの一本の松乃名と同じ意味なり。
○今按。詞ハ宮のうへにつく詞也。あれ時んハ。其涼きんざし時程が。あり
つきまとう宮のうへに詞に何とか見えて。思ふ由指すれバ。いかバかりか涼き
詞の徒にもてなし侍らんと讀て。さまたる人にハ詞のまた指なれ
バ。宮の上にあしかまてハあらしぬ故に。んざしハ涼かまたる其くなり
つきてハ。宮しにうしろかまた侍ることといふことをえあらり。新古今
其宮。宮の時後徳大寺左大臣の許にまかりける後朝の文にも
すゝしみゆやさふとおぼむれバまさ語もちて宿の宮の返しに後
徳大寺左。今ぞきくまんハ語もなかりきりける…やまた
諸首ともに心をよく似たり此返しを語て此阿の返しを
もんがたべし。諺解てらしくこゝろうること。中にも当なるこゝろなくて
いふからんざしにかゝることハ侍らばといへるを八時に和すなり。又語ハ
いふる時ん指も甚あやまれり左時詞ちかくの宮。まふ事にも
宮にんの語といふ讀る例あれきを考へるバ。かゝる時語の心か
きゝすあのづから知るべし。

埋火

冬寒き夜すゝし何から時霜ハつまるまで消がてにするる冬の埋火
諺解云。あつかりの霜とハ白灰のつまし。冬夜寒まハ炉中の火

のまりの露ハつきなく消えずして。炉火ハ消ぐるに勢をなし。火
乃きゆるにつきて。せうハいよ〳〵おそろしきまで成。ゆゑの露ハつ
きなきといへり。雪にハつきなく消ぬといふ同じ。

○今按。あらりハ閨のあられにて。露ハ実の露をいふなし。さゆる
夜に露ハきえぬもつきなけれど。埋火の消ぐるにあるを戦
きせしる詠なるし。諺解あらりを炉火の行くりと取て。露
おぼろの事といへるハたふ語なし。せうのなきをいふなれバ。このな
しるいとと有べし。つきなきといひてハ叶ふまじ。

性阿上人坊にて歌よみ侍しに佛名

呉竹のよよ乃ふるの名をしりてこそかゝる野伏の夜もさむらん

諺解云。これハ呉竹のよよとハ。竹に実も節も有れバ。こ
世の託胡の中にいへりとぞ。

○今按。呉竹のよよとおきつるハ。よのよと。野伏のふしの縁なり。
さて野伏の夜よりさむしとつゞきたり。諺ハ諺解にくはしく
いへり。但し竹に実も節もあれバといへる実ハいかゞあるべし。すべ
て竹に実といふ縁ハなきなるべし。本集秋歌。すゞのこや
ともやにと侍る所にも篠の実あるなふづくといへり。さもあ
ける事いかゞとあり。

入道二品親王家五十首歌

庭の雪にふらバといひし人ハ来でいそぐときたる年の暮哉

諺解云。庭に雪のふらバそひ来てみんといひし人もこざりし
ねハおのく年をいそぐ故ときたるなし。年をいそぐとハ来をま
つんよりいへり。

○今按。急ぐといふ詞。俗にハ物をまちかねていそやうに

るすさなきんとあるをいふなるに。古今によめるをもてみえんとの
給へり。草菴集ニ至りてハ春をまつやうにみゆるを見へ侍るなめれど。
いそぎハ凡て物の用意支度をするやうにもいふ事の多き
をいそがしきといふも此意より出たり。物語などに。何のいそぎ。ころ
のいそぎとおほくいへるも。その用意支度をするをいへり。然れバ草
菴の歌にもいそぎとよめるも多し。今の歌も。人の家にて年
末ぬにつきて。されバ草菴集年始の用意支度をするなる用意
のおほきなよしとあるを読べし。諺解のごとく春をまちかねて
いそぎてハゐしるあらず。ただ春をまつばかりをいへバ。家にて年
末なる事いそぎなきをいれバし。

續草菴集玉箒巻三

本居宣長解

恋雑部

稲懸棟隆
須賀直見　校

忍恋

かくばかり何ゆゑぬれてしるからでと思しもされどいはではあらさへん

諺解云ゝ

○今按。諺解のことわきまへず。此集思不言恋の歌の下にいふがごとし

深正尹親王五首に同じ人を

淵ハ瀬になりゆくよにせよ涙川またきバいはでせんぞうきぬる

諺解。云本歌朝飛鳥川　淵ハ瀬になる世なりともおもひそめてん人
をわすれじ　古今。詞をとりてよめる也。さてなげくにせんかたなき涙川の。

次第にまさりて淵と成ときハ。いよ〳〵せばめられるまで。淵とも
瀬もうたれずハ同じことなれども。瀬になりなからもよろし。浅くハ
人の足にてあさきと何とかまはずわたりもせべし。淵のふかくなりてハ是れ
をもて人めにもとりくるべきすみかならしまよとし。さて
○今日。淵の瀬にかはるといふハ。人の心のかはるすがたによそへたれバ。
常にハ嫌(キラ)ふ事なれども。是ハ飛鳥川の淵なるに。深きをいとひて浅
き瀬にかはりたりとせよと読るべし。されどといへるハ。常にハ瀬にかはる
をバ嫌ふことなれども。是ハかはりたりとせよといふことなり。 諺解
に瀬にかはりしとても是よと諺しくるハ。されどの外に寄たり。又淵も
瀬もかはれることハ同じことながらしていつハりなきことを知べし。
私云。取りし定家入せ給ひしこれ不審也
せぬことしかじつるこれを人のこゝろにたとへてもくさへりいひとも
雑下してしかふべし。但し諺解の説をバ猶いひつくし成
ありさまハ。つらきを人のこゝろになぞらへいふハ。わしく人のこゝろ
より外にハ何かねを世方よりおひくこゝろに思ひなすべし。是
こくゆゑなきといふ詞ハ。わたくしより左様にてハなれずを。左様
に世方よりきたるをいふ。次の序思のあはれたるになぞらへのあさきも同
じ。考へ合すべし。然れバつらきを然をわりとあさまでの詞と出て。
諺解のたがひやまりいよ〳〵明らかし。
恋詩哉
よし乃川をしらずとしらぬなき新緑なる思ふにちかくさしかふの糸
諺解云。なみ新せむがくべき宵にさしかふの蜘の糸まとひてみて
ちかしと。蜘蛛云々。新の思ふ等にくもの糸くをえたく。本意の
ごとく新せむが来べき宵にとりみてちらしたし。されども思ふ筈

名のごとく。糸も思ひて待ちけるなれバ。宵の間にもくるとしる
るなり。又かく来るとしるまじく。蜘蛛にいふ虫にて。平素糸をさ
にいふ義也。しるしるなとハ本文にてみえしるしもと知る詞也。
糸にしるしけるなといふ義也。他人にしらするなといふ義にあらず。
宵の間にハ来るなり。又かく来るといふ義也。しるくとハ巣かくるし。
るを思しよるし。本文に蜘蛛のふるまひとハ。巣を作るを言
ふなれバ。此文にハしるくとよめり。ささがにハ来るしるしにて。又糸にかゝる
といふ縁の詞なり。
○今按。ささがにとよめるハ。我せこが来るといふ事を昔の人にいへ
るなるを。蜘蛛に下知する詞也。思ひて待つ宵なるに。蜘蛛のしるくを
人のみしらバ。我せこが来べきことを知べきまで。宵の間ハしるくす
を思ふなく待つく。人にしるべきも…にせよといふまでし。語解云の

邪の説のごとくしくハむつかし。又宵の間にハ来るなり。又かくきる
来といふ義といへるも誤也。宵の間へと転ずるハ本文の詞を用ひ。
且ッ宵の間ハ人めしげゝれバなり。又しるくハしるくなれるを思ひさ
ふへといへるもよろし。即巣をかくるすがたハ行まだなり。詞ハ本
より別也。此蜘ハ俗に糸を引く簀子(スノコ)をかくなどいふかく也。此詞
ハかくんかくるなどいふハ活(ハタラ)をさもかゝるかきてとハなるらん。懸(カクル)
ハ。かきても活(ハタラ)きて。かくんかくくとハ活(ハタラ)かず。見べく無き詞乃
活用をよく見わきまへて混ずべからず。

総意

備をしめのむすぶこそあらねにちぎりしなかまれ何まちけん
語解云。新後拾遺恋三法下見備をむすぶこそあら
なきを祭りなるなどまちけん。此歌文字二ッちがひたるあり

大方同時代の人なれバ。互にさらひしてもよむまじき事なるべし。新続古今
集之二位家隆卿の歌のことは新勅撰にちぎらぬ歌のま
ゝなれども。其花も似たる所なし。撰集も年へだゝりて。春と月と
にまじるハ其花によくもよむべし。近き所ハさらひ文字にても其花もくだし
てよむまじき事なるべし。新勅撰花の心を思へども。やゝちかき歌なれバよ
見覚のなく 続古今 在原元方「春のまゝなる花の心を思へども。やゝちかき歌なれバさき
より覚えたる歌 新勅撰 景風 其も二字ほどちがひまでなり。しかれども上古
よりなることなり。続集著山花にも此類あり。さて
○今按。後撰に其為清卿の歌を出して。おのづから同じやうによそ
ありて見つるハむづかしなり。されど歌と今の歌とハ一ツ歌なるを作者
さらにちがへる物なり。まへの著山花の歌も其なし。家隆卿の歌ハ同じ
趣をまなびてよめる様其てなれバ此限にはあらず。又元方歌よし

思ひ寄らずとも。本ハ一ツなるが作者のまがひなるなり。其へて此例。中
比よりハ諸家にあるなり。然るき集ならバ。同じ歌にてしづ
かなり。又ハ全くちがひしかども。此新集にも此新集にも入るなり。
又撰集にも作者なりてもこと加しこれ所へしるすなど。何まさ
有るなれども。おほくハ作者のまがひなるなり。後あて見るにハいづしれど。
心得おくべし。諸解ハ其へてわかり給ふべしかれど。只一つより
見合して。おのづからよく合せまうけのことにつ。

製色意

さりとハ製しまでみちよはなかなか猶いつなり乃ち見申なる
諸解云。ちぎりもしおもにながらずとひきまでせし。猶さと申さい
つかり此心の見申るなり。此方度き備なき有て。製りてもとハながら
なる人の。てよびて製しにあるがなれど。其心ハ其よ進たり。月比の備

にあらぬひとくるしきなれ。さてそれに吉実の事によりて後の心ありなし。

○今按。諸解此否定といふより下さまである。猶偽のうへなる
とは。今迄でもりうるうの詞の中に。偽とおもひしきたりけれども。ま
実と思ひきぬし。当時は誤て見えぬを又偽とよむなりひとなる
に。先は誤をもぐんどらひしよふ偽と読るが能きなし。然れども
偽のなかるいもろきをいふおれど。さもしいひとりなるなし。諸解
のごとく日比の偽にあらぬといふと見る時は。いよくいひかなしけれど

後彼吉孝朝臣家まで別恋

またあはむ時も猶やうくん落なだしものめでゆるとくれ有ど

諸解あり。さて。猶の詞。諸句おもひてもの時はいよくのん。一本のあり
さとある時は二度の用にあたつ。始はまずのんのどて二度めはいよくの
心也。でふたく条にくるしくみをつきさどは。一首の心ふるく底に
徹せぬなり。よくく熟読玩味すべし。

○今按。諸解まづくよき注とすよし。但し猶句ありといとの時は
猶の詞二度の用にあつかいつらは。たるさる誤也。ありたの時は猶はやも
あるの意也。右のめでゆる別ありとし。右の意は中くりうるんなり。
此時ふいよくの心はかしもなし。さてく猶の詞二度の用にあつす。
きは気でもなれすし。一首の心ふるく底に徹せぬとはいふなる歌ごと
ぞやまへるく心ねなど。

為單家之首に贈別恋

縦や君後乃月日もよしやただ何かは別の文字うかるらん

今按。此歌よしやただといふ詞あるを誤り。諸解に俗語によし
にして。おきといふに同じと注しけるも。作者の心にはかなひもやせ
らん。詞の意にはかなはず。よしやは万葉にも多く縦の字を書

て孫がふるすにハ行かねども姑くをしみてゆるすと詞にて俗にも
そのさまをみるによいをまゝ姑のよといふなり。然れバ此歌ハ上句を。
よしやよし後の月日を契りおかむといへバ。此詞にハうなづくべし。
後の契りを契りおかねハ。孫がふるすにハ行かねども又おもひみれバ別の
うらみもなし。そのことを思へバ契りおかねもよいと思ふてゆるすこと
なきバなし。然るに此歌ハちぎりおくをよしやよしと行きかバ。大かた
背(ソム)けるなし。ふるき歌なるをよく考へみれバ。其味ハおのづから知り
ぬべし。

同じ衣を着て着衣を

うつり香の袖にぬもうし（そ）きぬ（キイ）を衣かへしてぞみつる夏ならぎりに

諺解云本歌いとせぬるく思ひし此時ハうちとけよるの衣を返し
一夜（ヒトヨ）をきる（こゝろ）衣をかへしてぞ寝れバ必恋しき人に行ふなる也。

今の歌も衣をかへしてぬれバ思ふ人に夢にて逢ふといひつたへし故。夏
の夜あかしに夢に見て夢に見ると思ひしまで。夢にうつりが袖にうつりて有ら
と思ふに。残り香の袖ぬるにまどひて実に夢としにハ行かねど。夏し
と言ふばかりにかはしたるなし。

○今按。衣をかへしてねれば。必恋しき人にあふなどといひしと
いへるハ俗也。行ふならひにハあらねど。夢に見るならひし。されバ古今ハ小町
の衣をかへしてぞ寝るハ思ふ人を夢に見んとのよし言ひならはせしにて。小町
が歌もそれなり。一首の心ハ。実に逢ふ事ハかなはぬともせめて夢に
なりとも見んと思ひて。衣を返して寝たれバ。夢にあふと見えしかど
も実の契りに行かぬなれバ。うつり香の袖にぬぐうまき
とよめるなり。諺解のごとくみてハ衣をかへしてぞきると言ふにもあはず
ひ。此ッ夂へしてそ見つると行ふ詞にもかなひがたし

古集五言歌乃並に三年不見書

なかぞらに玉づさ絶ぬまちこしかど雲の外居のうらびとるとこ

諺解云こゝ孫んでうなる文なり。三年までおこせずハうる
べきに。まして なかぞらにてたえにきさへ三年とおろかぬし。こゝ

○今按。上句ハ。孫んでうなる歌ハさておきて。なかぞらに歌ふさく
おこせぬと讀る也。諺解に。孫んでうなる歌なりとも三年おこ
せずハうかるべきにといへるハ無^{ツウ}せぬ注也。めし三年ゐて後に。なれ
ぞりなる文をおこせし時のうすなるハ。さもいふべし。こゝハなれざ
りし歌をいかでおこせぬ時のうすなきバ。孫んでうなる歌ことと
うるべきにこゝハ。何に對して、いふべきぞ。いぶかし

忠岑歌

わすれなく契しこともいかならんゆるなかりける人乃なとなに

諺解云。忠岑が中なきバ。年遠くなりし時。我をすさめぬ人なりとわすれなで
ちぎりしが。今ハ契りしすゑ未もわすれやしにけん。いつ
がわすれけん。子細ハ契りしまゝにて。文も音信もなく。かれはてぬらし
ぬる程の。浅き人の心なれバ。わするらん也。さながらハそまきなが
らし。ちぎりしまゝにて。程なくかれはてぬるをいへり。

○今按。さながらかはるとハ。わすれなと契りし。下條に對して。さ
かのうすぐるゝ皆ながらかはりぬるをいふ也。歌乃意ハ。歌中ハ何するも
まへにて皆ながらかはりぬる人の心なれバ。わすれなとおへ方契りお
きしうすもいかでかはらん。定めてそれもかはりてわすれしぞうらん
とよめる也。諺解さながら外を程ふるき故。一首の解をあやまれり。

聖護院道興歌

思ひ出るうれしハなくてとぞもちぎりかなし中とぞかはりハこゝろまぞもがる

諸鈔云。彼ヲ後ハ思ひも出まじ。ゐるまじ思ひいふなれど。何のかひ
もあるまじ。されど今ハかく此来りきて数よまるゝも有しと
思ふ方ハ思ひ出まじしてはかなし。左様なる事ハ。又自然しもちらの
つゐに逢ることもや有べきと。あらぬ心の中ゆゑかくおもふ也。
○今按。諸解ニ又自然なとなるやと拗ことわきまへたる筋にいへるハ
むかしの事也。さもなくてハ。かひハなきといひ中にも。かへりてハといへる事にかな
はず。かひハなきとハ。あふ事の無事すまじき思ひ出るもかひなくてあふ
ことハなくもといふ事にはあらじ。つまりのむハ。今ハ逢見ることハさもあらずもの
の中なきハ。思ひ出るかひハなきなり。されどもかへりてハ有様おきし中ぞと
思ふハ。されど思ひいでゝ人の心をのなかりに有りしかとし。

思恨忘

恋しく思ふにあらしつれなきよせしかて恨みがやいはれぬ人のつれなきをきかバ

諸解云。いかなる人のつれなき方ニて。逢見て恨んでするまじき様バ。恋し
からぬやうに恨みられじ。あらしかハ人が恋にありて逢時に恨みん
とし。さもあらばハ人にあるまじくてし。但俗のさめてふとしゆめる也。
○今按。恋ハされの人のあはる恋。あらしてハ強カありまでしもべらし此方
より彼方カナタへあらうをあはるといふし。古ハ物語にもあり。諸
解のごとく人が恋にありしとあはる時ハ。ありしくハ人のつれ。恨みがやを
強るりなきハ。二三の句の詞のつゞきにもあらざれ。二ツながら強きにてあれ
て恨みがやと連続しある語を味ふべし。さべらし強恋に人をあれ
ならく。人があはるゝ。くの恋に強をあはることハ。ただあはるとの思ツの差
別まてをおのく。詞下の語のつゞき格もかはるし。試に此所を以て
まず二句にて思ひの差別をあるバ。まづ一に強恋に人をあはるといふ
しをよまバあれて色もあて心ハともあるべし。二に強恋に人のあはるゝ

にしてよまバせめてなしとなバと有べし。三に人の姿に恋をよる
のうちよまば恋がらん姿にもせめてと有べし。只に人の姿よ
ヨガラんゆゑん八卯け今の句なし。よく〳〵これをまなぶべし。かくいへバいと
むつかしきやうなれど。詞づかひの意味を心得る時ハ。おのづからこゝろ
うるなるべし。

民アマ恋して暁鶏を

雑

あふ坂やまださる関の戸ハさぞねうしあるなる妓夢うる

今按。戸ハさしこめて何なる物なるに。治世にハさしぬに明る
といふ詞を强くいひたるなし。さて夜の明るハ鳥が鳴るをいはく。
鶏ハお坂の景物なれバ。鳥の声に夜の明るなるべし。関の戸を明るゝ
いふにハいらじ。戸の方にてハ明るハ何の縁とかあらし。俗解に。鶏を鳴
て明るといふなるも気に左。鶏のいらぬ字をいへるハ又かゝるべし。

日しらを

夜をのこゝら孫ござんに老を知そめて候を鳥が声にぞ立へつる

俗解云。老せぬうちハ孫ざんといふ事も知らりしに。けりの
後よりか暁がた夜の明る時分孫ござめざるによりて。弟の老なる
る事を知らくつりにしと何ぶに猶のうらしくて。鳥と日どせう
にならくを鳥が声にに候をきへるといへり。

○今按。よるのうちに孫ざんとハ。まざ夜の明りまで明るをるた
うら月のさむるし。これにか明るに八夜の明るころ孫ござめハしなるに。
今ハ夜ののこうなるうちより孫ざんさるに身て。弟の老ゆるこ
とをおぼしそめるといふ上の句なし。俗解のごとく暁がた夜の明
る時分ねざめたるといふことなれバ。初句何のつきのと有べし。よるを
のこりてとよめる事何の詮もなきことなし。さ此俗八鄙の暁の字をし

かゝりゐたる趣也。寡の孫ゐて暁ハしらまり。月ハそらまよりかゝる
きめくらんも何ゆゑなるらん。又老せぬ内ハ孫ぶれとハいふなれども
からしふといへるハ。近代。四十歳にちるぬ程ハ。孫ぶれをよろしかねと
いふ掟なり。かく信じたる意味の料簡也。されバ掟いとこれ
むつかしく寝覚(ネザメ)とハいつれもなるも寝(ネ)ぬ月なれあひたる時をいふ也。
然まバ誰とても起きすし孫ての事ハ何しれば初め然なるむねるき
ハあるわけなし。若き人孫ぶれせぬものといふぞいふべき。まして
ゐぬハおのが気のうへにかゝづらうぬるする事もよむハつまれあらひ
ぬまバ。しみそひ実に孫ぶれせぬ趣にも何きし。ゐぬによまんハ何る
かあらん。ゑくれ時ねざめするとをしれてよむまじくハ語せ
ぬ人ハ語の意よまれ。語せぬ人ハ意の意をよむまじきにや。

勝庵大臣家にして浦松

けふりだにたちもならはず塩やかぬ志賀のうらなる松乃一むら

諺解云。松の烟とて。松のこずゑに冷きにハ。何となくけふりのや
うに気の立趣也。竹の煙木の気のけふるなど皆同じ。志賀浦ハ
塩をやかぬ所。辛崎の一つ松ぞけぶりて。塩やく烟ともみち
まがふものなれ也。けぶりハさへし一つ松まて外になるめ本然
なきのみ也。けぶりさへ立なしとぞぬとよめり。

○今按。諺解松の烟のさまハそこにたとへず。只けぶりハさへこと
いふより下の注ハてよけれり。

右集五言為題江蒼苔満山径

苔ぬより日数もへしはこゝやまた本なうへを志賀まよる苔の通路

今按。此題苔の志がりみてよめるハいかにぞして四句より本の志がりなる
のこもろこしよりかれハ。題の満の字ハ。除山本の方へうつさで叶ず也

右軍東下て羇中作

くるゝまでゆきしにするがなるうつの山さかりて今も夢も夢ハ見ざらん

諸解云。うつの山を越るとて。業平於駿河なるうつの山べのうつゝに

も夢にも人にあはぬなりけりとよしけるをんなにおくる。夢にも人にあはなく

なりしハ。誠にさゆるしやらむ。此歌にハいかさまにもよしや夢ハ見てまじ

きなり。此さぞありハ前に有しるをさして誠にさもしやなといふなるべし。

又後に有べきなるをおもひしるさでいかんといふべくよめて此歌よ

ていまぞ夢も見えざらんといひくも哀さたち。さあり知てハ

なあさし。うつの山を出しける詮もありしとよむもの字に

よく。毎夜夢を見ざりしかばうつゝも人もといふなるべし。

○今按。諸解業平於駿を知ておいてといへる。その説ハむつかしき。

なあさしといへる後の説もよく聞へけり。うつの山の詮ありといふハ

ゆくらぬなるべし。他の名所ならバさてさもいふべけれ。夢をよくつゝ

がうつの山の詮也。名所の名よりよむ事を知べきなりとて。類を以て

知べし。又といひものといの字が見極もつかし。此といハ。夢さるまでの

夢に対して。今夜も夢に夢ハ見ざらんの意也。

入道二品親王家五十首歌に

末にならふべき峯は高師の山よりもつる雲とみゆりなりけり

諸解云。高師山を越るとて詠り。此高師山も二見に山なる歟。

ゆくくに越てこれぞ。此末にも有かくなるき山の有をみん

て。此高師山をさえてゆけバ。ゆきや高山も有まじ況と思へど。

又末にもゆりさてもなきせぬ高山ありぬ。いかなつくるべきなぞ

と思ふ所に。此の方を見れバ今とゆくりける山の雲ぞとてこ

こにてみれバ林森の中なり。先にて高師山の高き程もしられて

まだ花もまだしといふ高き山ハいかゞせんとあきらめて立る
体也。おきバ又ふもとべき山の峰なきや花ぞ月の末は夕霞 新古今 家隆
山高三夕おハふもとに加ぶりぬ明月にこし峰のあら霞 新後撰 衣笠内大臣
引合てみるべし。此なりきりにんをつくべし。
○今按。高砂べき峰といふが即高師山の峰也。なつる霞といふ
も高師山乃内の事也。高砂とハ。雲をなつて高師山を申しくと
のがりて。ありとや大きる峰なるべしと思へバ。峰ハ猶未に高くえ
えしるき方也。さて峰ハ高や未に高く天両るにつきて。花を今
のがりける雲ハ。高ぶ始めて有と見るよと知るんすて。ありうき
と消えきり。未とハ今高のがる山のゆくさえをいつる也。又別に峰何
高にハおえれバ。諺解の注ハ一首の意つらぬるずくぐくにたがわい
三段の句をつゞきて心得る處に。上二句を高師山の亦一に又ふるき峰と
ありとみて。一首の意をいやまさり。高砂べき峰は高師山とあ
ふりるハ。此峰ハ即高師山の内のあふりいきりきし。
長秀 中条台 新拾遺に入る高き峰の待しを高
庫入道
しつらりし待しふれ
今ぞたちやんの未をしるありゆるさえしれを見てしあきしり待き
今按。諺解に二説を出せり。此中に後の説ハ今用ふたし。返ても
ても知べきし。前の説を用べし。返あとはじ。さて此高の句の
ゆらし。今ぞとなりやと言ゆてつらふべき胸ずしいらん
薀堅ゆくゑて人て高よく待し時述懐
人あらばそのかくありなん八十まで和高あつうつあつ立まじるらを
諺解云ミく。和高ハつゆに猶言続ぐといひて。後世称ぶあて
さりりとなるなぐいふ人あまた。後進ハよしゆくによるなり也。高ハ心上

にある所の風雲花月を詠て。心外の物につかまれぬやうにせられバ。心の
さはりになれバ。心をほかへちらせて。気につかまるゝ也バ。心のまよひとなる也。さて
○今按。読解し。此詩意をさとれるハしかるべし。用べし。但右にいふところ
の論ハ大事なる也ごとし。まづ此よむ人の後世称ぶさはりになる
なしふる詩さうふハ作者よりいふべきことにて。読者におきてハあづ
からぬことなれバ。此義なぐさ。称いちいちいふにも。古人の心のもちに依り。
よくせうにより。此によりて。さはりとも成り。又しめとをたる成なべし。
然れども其れハ心上の物をよむと心外の物につかまるゝとの差別に
よるものにハ何しらず。まづ此よむに心上の物心外の物といふ事ある
べくもなし。是ら究論し。述べて此ハ外物に心のつかまるゝに依て
出来る物と知べし。いふといふに。此にある人事に命まで。まなくう
なしとも何ぞ其とも見して見しに思ふものある時

に此歌ハよみ出られし趣なるが。そのうちにふかき心ありと思ふなりの
何るが。即チ外物に心のつかまれたといふものなり。然し外物に心をとらバ
末述べし心におかれたるハ有まじき也。さて思ふにまたハ作を種(タネ)
まづ此ハいづくへぞ。読解此意を深く考へざるが故に此詩の
本分をしらねバ。しらぬを知らず。説(トキ)なせる所の作諸の塵入の義にも
かなはず。かまはず。猶りもなれ妄説也。且つ心上にある所の風雲花月
といへるも今比ぶ人の心上にして風雲花月何る物にあらねバ。ありしそ
としてあらバ其れが即チ心を外に走らせるなり。さればハ風雲花月
ハすべて外物なるに其れを思ふ故に心上にもあるといへるにハ
何もなしや。然し外なる風雲花月を思ふ時ハ心がいなくなる
物あるべきやうなし。然れバ是をもつて外物につかまれてより出来る
所心上の風雲花月と知るべし。

後の世に此身をかへてしよりあらく市の中といへるまで　家市雑といふこゝろ

後解云。後世様がりんまゐに身を捨たれバいづくにても心を閑す。後世さへ願ひたれバ。かくれて山中を求るにも及ばず。市中にてもん活用すて願ひたるべし。白氏云く進ミ不厭朝市ヲ退テ不戀人寰ヲ 同。大隠ハ在ニ朝市ニ小隠ハ在ニ丘樊ニ 同 云く

○今按。市ハ物をあ出くるがゆゑに富る處にたとへて八市の縁の傍まり。此の句のこゝろハ。後の世の果報にたとへて。此世の身をバ捨て後の世をかへてたのしむといふべし。意の身に為に命をかろふるといふも同じこと。下句ハ此身ハ市に捨てる物ならバ。それも如くても身ハなかり。却て市の中をといふハなきこと。中くハ却てし世捨人ハ市中をバいとふべき理なきなり。其くるまハ此身なるなれ却ていとはぬなり。

後解を上の句は注釋異にして。作者は世をのがれて下句をもつてゆゑしは隠者はいふこゝろなく人を避て住しけるなれ。世のなかにまじはらば。此世の市中をいとはぬハ。かのかくれ人ものいへることと異なり。又たゞかくは心も身は注にてハ見てしまへ。心を付て味ふべし。又白氏が詩をともを引けるハ何しかしねど。大隠ハ朝市ニといふ事ハ。猶よく記書そえてしかり。

日吉社にまゐりし時

などかきかにまうしは道乃たよりなれ神はうくべきいのりと思ふに

後解云。社頭にまゐりて祈るに。願力はいちじるしと思ふにぞ。ふかく思へバなどかまことは心のたよりなれなぞ。たのむべきなりし。子細をまことを以てさへいのらば神のうくべき祈りしと思ふに。うち絵ハなき冊識のうちなれ出て。神に恨ミハなし。深くまことをつくし

たれるべし。つくさバうたをよむべきと。其のうへにかゝりみるべし。
○今按。此歌なども。きぶにとよめる事誤なり。などかとならバ。ゞふとハ義理反對するなれバ。引つゞきていふべき詞にあらず。めしあひはくゐるまでたいなれバ。一旦ハなどかと咎めて。又よく思へバ。ゞふとおもひ直せることをもいふべけれど。一首に轉ずるにあらず。ゐるさひさるゝことにもせよよろしからぬ事なるべし。されど作者の心をおしはかりて注せバ。むるにあたる孫く侍りける人ゞぶんに識の底にかなひなバ知られんとも神ハちはやぶるといふ歌によりて侍るなるべし。さて歌の心ハ。作者の心に思へる中に。かの歌のめぐく。實（げに）く外にハ知られぬか。まことの底がかなふち神のうくべき祈と思ふべし。然れバ隠るまことの底をつくさバきるすなるに。などてかちくまきぬすぞく。きが識のいとねすをなぎるべし。ゞふとハかの歌を上うきていへるなり。さて此ゞふの詞を下旬の頭へうつしてみるべし。さてまことゞならにてよろしきを。底といへるハ。かの歌の詞によれるなり。さて底の緣にてきこえはねとハよめり。諺解もあひはく義理をつきする説にて。きこえしかたうへと何ならず。又ゞふといふ詞ハ。かくならびたるまでいふ儀なるに。かの注のめぐく思てハ何とも兼ていへりとも聞えず。此詞歌の心ならずにてなまり。

盧堅　月次テし神祇

同すゑしな神のひとつのこゝろハ人にあらはれまし。なれど
諺解云。同にゑしな鬼神をもとのたましと思も古今。歌をよむ乎心の儀をつらしてたゞ物の底理を歌にうつす時ハ。即神も其中に有て。よく人にあらはれて理りしるまで神底歌底一致なれバなり。此歌ハとハ。今此和歌さうえて底をよく人ゞしてよむ時をいふなり。
○今按。歌ハことハ。萬時歳夜の事ハ在にかなひて。人々よく歌

さとく出るゆゑ。神も此方に感じ給ひて。霊験ある也。目に見
えぬ神も何ぞまことおかしき事を人にしらしめ給ふべし。人
にしらるゝは感應霊験のあるによりて。神の心を人のしる也。又目
に見えぬ物は人にしらるまじき理なるに。しらるゝといふに疑ふ也。儀解
に聊神もこの中に来りて人にしらるゝ理也といへるは。能々又は宗儀
などの理論にへつらへる近代の神道者のことにして。大に吾神道家
為のことにあらむきことにて（神道家々の事は事別に／らしき論あり）此方の心にはゆりしよりしるが
へりよく出る方の中に神の何んをば何を以て人は知べきぞ。或と
ひ其理はありとせよ。人にしらるゝといふにかなはず。是よ何といふ事
と。是は無用の妄論にあらずよしなき空理をやめて。方術詞
をよくよく考へるべし。

此ごろ諸家物学の抄や耳にし中古
本居翁の説をむねとし加茂まし、
祖とし故阿法師乃草稿秦乃塵
けしはむとくねもし常をかへ孝し
玉篇熊本書れ多能の氏法理化
あらはすみちけすてかなへゐるへ多
あやしき年理ぬ其姿以て津に

蛇のすゝ見えてましま捨てゝいさく
すゝきたるに百年書ある人此せられに
古風をしも見こそ殊にわかむかし律
しきこゝろにしみ筆まかし
あゝ捨しも今はゆたし波菴八旬にきと
いはれ大くのかやの弥蒲路なれるに清
かくはしき誌をあつゝめし皇玉の孫

遊ふらしにし万葉世にも書写し待望
ゆかしのむかしをも筆をとりて村田橘泓古も
蛙清ら那ちかく此葉をと松乃箱家に
手記あり見語ふるかつしへゆ文いさしう
書之人律

天明六年丙午秌發行

書林

京都　河南四郎兵衛

同　林伊兵衛

松坂　柏屋兵助

同　藪屋勘兵衛

津　山形屋傳右衛門

国立公文書館
National Archives of Japan